

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Museum materials as cultural resources : the significance of the Taiwan aboriginal people's artifacts collected during the Japanese colonial period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野林, 厚志 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003900">https://doi.org/10.15021/00003900</a>

## 文化資源としての博物館資料

—日本統治時代に収集された台湾原住民族の資料が有する  
現地社会での意義—

野 林 厚 志\*

Museum materials as cultural resources: the significance of the Taiwan aboriginal  
people's artifacts collected during the Japanese colonial period

Atsushi Nobayashi

本稿は、国立民族学博物館に収蔵されている日本統治時代に収集された台湾原住民族の資料が、現在の台湾社会において有する社会的な意義について考察することを目的としている。原住民族の物質文化は歴史的には彼らだけの閉じた系の中でつくられてきたものではない。近代以降をとってみても、日本統治時代には工芸という概念が原住民族のもの作りにとりこまれ、第二次世界大戦以後は原始芸術と見なされた状況から、より自発的な原住民族芸術へと移行する過程が見られる。現在では、台湾アイデンティティをしめす一つの要素としても原住民族の物質文化がとりあげられ、マジョリティである漢族系住人と協同したもの作りも模索されている。こうした状況のなかで、博物館における原住民族の歴史的な資料も人々の関係性を新たに築いていく文化資源として機能していることを、現地で開催された展示会の経緯を例にしながら考えることにする。

The purpose of this paper is to discuss the significance in Taiwan society of artifacts collected during the Japanese colonial period in Taiwan. The material culture of Taiwan aboriginals was not necessarily constructed among them alone. Even during the modern era, Japanese people introduced the concept of arts and crafts to Taiwan aboriginals' manufactures in the Japanese colonial period. After WWII, the tools and clothes of aboriginal peoples were recognized as 'primitive art' by others, and then aboriginals themselves insisted

---

\*国立民族学博物館文化資源研究センター

**Key Words** : Taiwan aboriginal peoples, museum materials, material culture, cultural resources, classification of ethnic groups

キーワード : 台湾原住民族, 博物館資料, 物質文化, 文化資源, 民族分類

on their creations as aboriginal arts. The material culture of aboriginal peoples is currently one component of Taiwanese identity. Some aboriginal artists try to create their art together with Han Taiwanese people. In this sense, the aboriginal materials in the museum have worked as cultural resources to bring about a new relationship between the different ethnic peoples in Taiwan. I discuss this through a case study of an exhibition in Taiwan.

1 問題の所在	4.1 東大資料と鳥居龍蔵
2 台湾社会における原住民族の位置づけ	4.2 旧文部省資料：鹿野忠雄と馬淵東一の収集
2.1 台湾原住民族	4.3 瀬川コレクション
2.2 民族認定と信仰	5 展示資料の情報をめぐる課題
2.3 平埔族の原住民族認定	5.1 資料と民族との関係
2.4 原住民族の工芸をめぐる民族間関係	5.2 資料解説の視点
2.4.1 日本統治時代における工芸としての認識	6 展示会の準備の過程における台湾側の反応
2.4.2 原始芸術と工芸	6.1 資料返還に関する課題
2.5 文化的営為としての生業活動	6.2 資料の制度的価値
3 台湾における博物館と原住民族文化との接点	6.3 資料の解釈をめぐる矛盾
3.1 順益台湾原住民博物館	7 考察
3.2 博物館と原住民族との協同の事例	8 結語
4 民博の台湾原住民族関連資料とそれらをめぐる研究者の営み	

## 1 問題の所在

本論文の目的は、2009年6月より約4ヶ月間にわたり台湾の台北市にある順益台湾原住民博物館（以下、順益博物館）で開催された特別展示会「百年來の凝視」（以下、順益特別展示とする）の展示の内容が構成された経緯、展示資料が有する歴史的背景、そして展示資料をめぐる台湾側の反応について記述し、文化資源としての博物館資料がどのような社会的意義を有するのかについて考察することである。

順益特別展示では、日本統治時代の台湾において収集された台湾原住民族に関する資料を公開すると同時に、それらの資料を収集した研究者のフィールドノートや自筆草稿を展示し、博物館資料の収集が研究活動と不可分な関係にあることを伝えようと試みた。展示資料はいずれも日常的に使用されていた道具や衣類が中心であり、いわゆる作品と一般に称される著作性が生じているものは含まれていなかった。また、これらの資料は現在、国立民族学博物館（以下、民博）に収蔵されている学術資料である。

展示会を開催するにあたっては、当然のことではあるがその目的を明確にする必要がある。順益特別展示の図録に明記され、展示会場にも提示された本展示会の目的は次の3点のことを観覧者に伝えることであった（野林 2009a: 19）。

- ①台湾原住民族が伝えてきた芳醇な工芸文化
- ②原住民族の物質文化に魅せられた研究者たちの営為
- ③文化資源としての原住民族資料を伝えていく重要性

これらの3つの目的がかかげられた背景には、台湾における原住民族の社会的な位置づけの変化とそれともなう彼らの物質文化をめぐる社会的、経済的状况の変容、そして、博物館が担う学術的、社会的役割といった課題が存在した。こうした課題を考慮したうえで、順益特別展示は「平埔文化」「信仰文化」「工芸文化」「生業文化」「音文化」「衣飾文化」「嗜好品文化」という7つのコーナーで構成された。

本稿ではまず、これらのコーナーでとりあげたいいくつかの課題が展示会の構成要素となりえた背景についての説明を行う。特に、1980年代以降、顕著となっていった原住民族の人々の民族意識の覚醒が順益特別展示において設定された主だったテーマに少なからず投射されてきたことを、彼らの社会的な位置づけの変化ならびに彼らと他の民族との関係、すなわち漢族系住人との関係に留意しながら記述していく。

次に、民博に収蔵されてきた台湾資料がどのような来歴をたどってきたかについて解説を加える。博物館に収蔵されている資料が、その博物館で展示されたり、他の博物館等に貸し出され展示に供されることは一般的に行われることである。一方で、資料がその収集地においてもはや入手できない、もしくは代替できないような類いのものである場合、博物館はそれが収集された土地の人々に対して、その資料を将来にわたり継承していくという大きな責任を負うことになる。今回の事例の場合、日本統治時代の収集活動によって博物館に集められ、収蔵されてきた原住民族の資料の大半

は、その後、生活の様子が大きく変わっていった彼らの手元にはほとんど残っていない。これらが、現在、彼らの民族意識と密接に結びついている状況に鑑みた場合、博物館の資料がその収集地である台湾で展示されることの意義は十分理解しておく必要がある。

以上のような、順益特別展示に関わる社会的背景と実際に展示した資料に関わる歴史的背景を見据えた上で、展示会の準備段階ならびに開催中の展示会に対する台湾側の反応を紹介し、博物館資料が有する社会的な意義を文化資源という脈絡で考察していくことにしたい<sup>1)</sup>。

文化資源については、アボリジニ文化が見るべき価値のないものとされていた時代から、オーストラリアの国家的アイデンティティの一部として認められたことにより、アボリジニ文化の社会的な理解につながっていったことを例にして、与えられた状況の改善に資するような物質または活動のことをさすという窪田の説明（窪田 2007: 181）、資源ゴミとのアナロジーで、無用の烙印を押されたものでも再利用を可能にする方法の開発を行えば、文化研究に資するものとして再び光を与えることが可能となるといった木下の説明（木下 2003）などをあげることができる。

本稿は博物館資料のもつ社会的な意義について考察するものであり、木下の用いた資源ゴミとのアナロジーとは対極に位置するものである。博物館の資料には無用の烙印は押されていないこと、さらに博物館資料は文化研究に資するだけでなく、社会的な存在意義がその属性としてもともと備わっているということを前提としたうえで本論を進めていくことにする。換言すれば、博物館資料は研究が行われたから社会的価値が発生するというものではなく、もともとその資料が有しているさまざまな潜在的価値が学術研究によって引き出されていくということである。

また、社会的な意義の内実は多様なとらえられかたができるであろう。本稿では特に博物館が収蔵する学術資料が歴史的な過程を経ることによって、それらが収集された現地社会においてどのような意味をもつ存在となりうるのかという視点からの考察を通して社会的な意義をとらえることにしたい。

## 2 台湾社会における原住民族の位置づけ

### 2.1 台湾原住民族

台湾原住民族とは台湾に居住してきたオーストロネシア系の先住民族である。彼ら

が原住民族とよばれている理由や民族構成、民族分類に関わる歴史的背景については、少なからぬ論考が重ねられてきた（笠原 1998; 陳文玲 1998, 2000; 野林・宮岡 2009）。原住民という呼称は 1994 年の中華民国憲法増修条文（追加／修正条文）によってはじめて明記されたものであり、その後、1997 年の増修条文によって、原住民族という呼称が用いられることになった。原住民族という呼称が用いられるまでは、その時々々の為政者によって、山地山胞、高砂族、番族といった名称が与えられてきた。また、政権を異にする大陸中国側では、原住民族の人々は現在高山族と称されており、中華人民共和国における 55 の少数民族の一つに数えられている。

原住民族という名称で彼らが呼ばれるようになった過程は一般に「正名運動」とよばれている。台湾では第二次世界大戦終了後、長期にわたり国民党が政権を担ってきた。大陸中国が共産党政権によって掌握されると、1947 年に国民党政府とそれを支持する人々が台湾にうつり、大陸中国と台湾との間に政治的な緊張関係が生じた。国民党政権は、彼らが台湾に入るまでに台湾に移住、定着し、台湾住人の大多数をしめていた漢族系住人、いわゆる本省人と呼ばれる人々を抑圧し、事実上の一党独裁政治を行った。これに対して、1980 年ごろから、台湾の経済成長にともない経済力をつけていった本省人は政治的、社会的発言力を増していき、台湾の民主化が庶民レベルから進んでいった。当時、山胞とよばれていたオーストロネシア系の先住民の人々も、台湾における社会的な変化に呼応しながら、自分たちの権利を主張し、民族の歴史や文化を尊重することを目的とした社会運動を展開した。これが、1980 年代後半に開始された「原住民運動」と呼ばれるものである。この原住民運動の中で、それまで漢族式の姓名を制度的に名乗らざるをえなかった個人、そして集団としての民族がもともとの名前をとりもどすという目的で行われたのが正名運動である。

原住民から原住民族という呼称への変更によって、民族の総体としての位置づけが台湾社会の中で確立していったと考えることもできる。実際に憲法の増修条文では、次のように記されており、民族に対する文化や福祉の振興が約束されているため、原住民族の人々を対象とした様々な法律や制度が整えられていった。

「国家は多元文化を認め、原住民族の言語と文化の発展を積極的に擁護する。国家は民族の願望にもとづき、原住民族の地位および政治参加を保障し、ならびにその教育、文化、交通、水利、衛生、医療、経済、土地および社会福祉事業に対し、保障と扶助を行い、もってその発展を促進する。その方途は法律をもってこれを定める。金門、馬祖の住民に対してもこれと同様とする。」（中華民国憲法増修条文第十条の一部。筆者訳出）

中華民国下の台湾では大陸における政権時代の名残がしばらく続き、政府の中央組

織に蒙藏委員会や僑務委員会といった民族に関わる委員会が存在するということが象徴されるように、漢族も含めた複数の民族集団が国家の中に存在するということを認めるいわゆる多民族国家という立場はとってきた。しかしながら、台湾自体の先住民民族である現在の原住民族の人々に関しては、当時用いられていた山地同胞や山胞といった呼称にも表わされているように、民族としての位置づけは希薄といってもよく、一連の憲法改正によって、ようやく自律的な民族としての位置づけが認知されたと言ってもよいであろう。

現在、中華民国籍を有する者のうちで原住民族であるためには、「原住民身分法」(2001年)にしたがった原住民という身分の認定が必要であると同時に、各原住民個人の民族認定が「原住民族別認定方法」(2002年)によって定められている必要がある。すなわち、原住民の身分を有する者が一つの固有の「民族」を名乗ることが法的に定められているのである。

個人にとって自分が原住民であるか否かは、原則として原住民族の原籍を有しているかどうかによって決まる。そして、原住民族の原籍とは、日本統治時代に定められた特別行政地区に居住していた者ならびにその直系の子孫であることが基本的な根拠とされている。換言すれば、日本統治時代に蕃族もしくは高砂族と称されていた人々とその直系の子孫が原住民の身分を得る資格を有するのである。そのためには、個人は自らの出自を何らかの方法によって証明しなければならない。漢族系の人々と異なり、文字による系譜をもたない原住民族の人々は、日本時代に作成され中華民国時代にひきつがれた戸籍にもとづき、その原住民の身分が保証されることになる。一方で、個人がある民族を名乗る場合には、その民族が集団として他の民族と区別される要素を有した固有の民族であることが政府によって認められていること、さらに個人がその民族集団に属しているということが必要となる。

ここ数年台湾では、血縁や地縁を含めた出自をともにする人々が集団として自らの民族の固有性を明らかにすることによって、固有の民族集団としての位置づけを新たに確保していくという現象が生じてきた。日本統治時代の分類をもとに、中華民国施政下では長期にわたって原住民族は9族であるという認識が強かった。これに対して、出自の相違や文化的、社会的特徴にもとづいた「新たな」民族集団の認定が相次いだのである。2001年にサオ(邵, Thao), 2002年にクヴァラン(噶瑪蘭, Kvalan), 2004年には、タイヤルのうち花蓮県を中心に居住する人々がタロコ(太魯閣, Taroq), 2007年にはそれまでアミに含まれていた集団がサキザヤ(撒奇萊雅, Sakizaya), そして、2008年にはセデック(賽德克, Sedeq)が独立した民族集団とし

て認定されるにいたった。

ここで、「新たな」という表現を用いたのは、台湾社会一般にとっては新たな民族の認識ではあるが、当事者にとってそれは必ずしも新しい民族の分類ではなく、もとの民族の境界が、制度的な民族分類には反映されていなかったにすぎないからである。そして、民族の境界を可視的に示すものとして、物質文化の存在が少なからず意味をもつ状況が生じている。

## 2.2 民族認定と信仰

自らもサキザヤであり、サオやクヴァランといった先行した民族認定の過程とサキザヤの民族認定の可能性を比較して論じた陳俊男によれば、サオの事例から、民族の認定には、(1) 学術研究、(2) 法的根拠、(3) 民意の動向、(4) 「官意」（非主管機構の便宜的な呼び方）の4つがあるとされている（陳俊男 2006: 135）。学術研究によって、言語学的、歴史学的、人類学的な証拠が提示されるということが、民族の認定には必要とされており、例えば、サオの集団認定にあたっては、サオ語の独自性、歴史文献上の記載に加えて、周囲にあるツォウといった原住民族集団との境界が、サオの人々が固有に伝えてきた公媽藍仔信仰の存在で維持されているということが大きな理由になったとされている（陳俊男 2006: 136）。

サオは台湾中部の日月潭とよばれる湖の周辺に居住してきた人々である。日本統治時代の原住民族の分類では、例えば鳥居龍蔵や移川子之蔵がサオを独立した民族として扱っており、戦後には、国立台湾大学の陳奇禄が『日月潭邵族調査報告』（1958）を著すなど、サオが他の民族との境界をもつ民族集団であるということは研究者の間ではある程度の共通認識が以前からあったと言ってよい。しかしながら、日本統治時代に総督府が行った民族分類ならびにそれをひきついで中華民国の民族分類の中にはサオは含まれておらず、彼らは通常、隣接するツォウと一緒にして扱われてきた。一方で、サオの人々自身とサオを包摂していたツォウとはそれぞれに異なる認識を相互に有していたことが指摘されていた。国立政治大学の林修澈らによれば、サオはツォウのことを異民族（*Laolavai*）とみなしていたのに対し、ツォウはサオのことを兄弟関係にある民族（*Oahangu*）とみなしており、民族間関係における他者認識にずれが生じていたとされている（陳俊男 2006: 136）。サオは平地原住民籍を有しており、サオという民族集団としての自覚は有していたが、ツォウという民族集団に組み込まれている状況が続いていたのである。サオの人々は自分たちの集団がツォウとは異なる民族集団であるという認識のもとで、「正名運動」を起こし、サオという独立した民

族の認定にいたった。その要件として用いられたのが公媽藍仔信仰であった。

公媽藍とは、彼らの中に古くから伝えられている竹や籐を用いて製作された籠である。サオの人々はその籠の中に祖先から伝えられているとされる古い衣服を入れ、それらを家屋の中につり下げたり、置いたりして、祖先を祀る慣習を有する。こうした祖先を祀る信仰はサオの人々の間に伝わる次のような故事がもとになっている。かつてサオの首長家に黒い肌と白い肌の兄弟が生まれた。首長は黒い肌の子どもを湖に落とし、溺死させたところ、夢の中にその男子が現れ、村人全員の家に祖先の衣服を入れた籠を置き、祖先の霊をまつらないと禍が起こると伝え、以来、サオの人々の家には必ずこの籠が置かれるようになったというものである。公媽藍仔とはさしずめ、公媽藍の子どもと訳すことができる。黒と白という対比が、原住民族と漢族系住人を象徴的に表しているようにも解釈できるこの故事にもとづいた信仰は、サオの人々に伝えられてきたものであり、ツォウ社会や他の原住民族集団には見られない。

民族集団間で信仰の差異があった原住民族社会では、民族の境界を示す一つの指標として信仰は有力な手がかりとなりえたと言える。サオとツォウのように民族の差異をもともと強く意識していた集団間はもとより、同じ民族集団とされている人々の間でも、地域による差異が存在することも少なくない。例えば、パイワン社会で儀礼を行う職能者が用いる占の方法は、東部地域では竹ひごを木片に強くこすりつけて割き、その断面の形状から判断する方法をとるのに対して、南部地域では瓢箪を使った方法が用いられるといったように、同じ民族集団のなかでも信仰に関わる行為の細部には差異が存在してきた。東部の竹ひごを用いた占の様式は、東部のパイワンが接しているアミやプユマが行うものとも酷似しており、同じ民族集団でも、地理的に広い範囲にある場合は、他の民族集団との接触の様相が地域によって異なり、それに応じた変異が集団内に生じている場合も少なくない。

また、原住民族社会には、第二次世界大戦後の中華民国施政下、キリスト教が急速に浸透していった。この背景には、教会による生活扶助や学生の奨学金の給付といった経済的利点もかなり強く働いてきた。また隣接する漢族系住人の影響で、漢人式の祭壇や位牌をとりいれる家庭も少なくなく、彼らの日常的な信仰の中に外来の宗教が組み込まれていった。一方で、従来の慣習的な信仰が保持されることも少なくなかった。例えば、東海岸部に多くの集落を有するアミ社会にもキリスト教は浸透したが、シカワサイとよばれる呪医による病気治療や祖先祭祀の慣行は継続して行われてきた(原 2000; 2005)。プユマ社会では、慣習的なシャーマニズムが漢族式の位牌祭祀や童乩と併存してきたことが知られている(蛸島 2005)。

これらのことを考えた場合、信仰の様相とそれに関わる物質文化は、民族の境界という原住民族にとって重要な現代的課題を議論するうえでの鍵となりうることが理解できる。

### 2.3 平埔族の原住民族認定

台湾では現在、政府が認定する原住民族の人々とは別のオーストロネシア系の人々が居住してきた。彼らは一般に平埔族とよばれている。平埔とは平地を意味した言葉であり、清朝期に平埔番とよばれていたものを日本統治時代に平埔族として日本がひきつぎ、その呼称が現在まで使用されてきた。平埔族は歴史的には西部ならびに北部の平野部に居住してきた人々であり、バサイ、ケタガラン、パゼツェ、パボラ、バブザ、ホアニア、シラヤ、サオ、クヴァランといった民族集団が存在していたことが人類学や言語学を中心とした歴史的な調査によって明らかとされてきた。これらのうち、サオとクヴァランは中央政府によって原住民族として認定されており、シラヤは地方政府レベルで原住民族として認定されている。その他の集団は実体として継続してきたかどうかについては定かではない。

平埔族の存在が台湾社会の中で注目されはじめたのも、やはり1980年代後半の原住民運動が生じて以降のことである。とりわけ、台湾文化の多元化が社会の中で強く意識されていった1990年代以降に顕著となっていった。クヴァランの調査を長期にわたって行ってきた清水純はこの現象を平埔ブームとよび、その背景として、大陸漢人社会に対する台湾漢人社会の独自性を強調するうえで、移民社会発展の基礎となった先住民族と漢族との融合によって生成された平埔社会に焦点があてられていると説明している（清水2005: 122）。原住民族が漢族系住人とは異なるアイデンティティを有する台湾を象徴する存在であるのに対して、平埔族は漢族アイデンティティを内包する台湾アイデンティティとして説明可能であるということになるのであろう。また、サオやクヴァランの原住民族認定は、他の平埔族の人々にとっても原住民族帰帰のきっかけになっている。

平埔族の人々は平野部に居住していたこともあり、比較的早い時代から漢族系住人との接触をくりかえした。その結果、言語や慣習、社会構造は大きく変容し、漢族化が進んでいった集団と認識されている。平埔族は原住民族とは異なり、政府が認定している身分に規定されるものではない。平埔族とよばれている人々の中には、日本統治時代に平地行政特別地区に居住していて、その後、平地原住民としての身分を得た人たちと、漢族系住人の居住地に住んでいて、原住民原籍を有していない人たちと

にわかれている。サオやクヴァランの人々は平地原住民の身分を有していたので、個人としては原住民の身分を有しており、その後、民族集団としての認定を受けた。一方で、南部の台南県から高雄県を中心に居住してきたシラヤの人々は原住民籍を有していない。山路勝彦は彼らが歴史の過程において、周辺民族、とりわけ漢族とは異質であるという自己認識を喪失していき、「蜚蜚」化した存在になっていると指摘している（山路1998: 35）。蜚蜚という比喩が適切かどうかは別として、明らかに対象となっている人々の言語、生活形態や慣習は他の原住民族のそれらに比すれば、漢族系住人のそれらに酷似している。一方で、民族境界を示す重要な鍵となりうる信仰については、アリツ信仰とよばれる漢族系住人のものとは異なる性質をもったものや、アリブーとよばれる平埔族の神の崇拜や、神々が宿ると考えられてきた花瓶や小壺を祀る、明らかに漢族系のものとは異なる慣行が存在している（山路2003: 117-118）。このように、漢族ともシラヤとも確定できない人々が、自らを平埔原住民族として地方政府や中央政府に働きかけるという状況が近年生じている。台南県ではすでに2005年にシラヤは県の定める原住民族と指定されており、県政府には西拉雅原住民事務委員会が設置され、中央政府に原住民族認定を働きかけている<sup>2)</sup>。

一方で、こうした平埔族をめぐる状況は、実体のない民族文化の再生産につながることも否定できない。例えば、台北近郊に建設されたケタガラン文化センターには展示施設が設けられているが、そこにはケタガランの資料とよべるものは展示されておらず、他の原住民族の手によって展示用に新たに製作された道具や衣類が並べられているにすぎない。

以上のような点を考えると、平埔族の中から新たな原住民族の認定を求める集団がさらに生まれてくることは将来的に十分予想される。分類の主たる根拠とされてきた言語学的な証拠については、それぞれの言語の話者がほとんどいない状況にあるなか、平埔族に関連した歴史的な文書史料や物質文化に関わる資料がその重要性を増していくと言えるだろう。

## 2.4 原住民族の工芸をめぐる民族間関係

順益特別展示の第一の目的にかかげた「台湾原住民族が伝えてきた芳醇な工芸文化」は、原住民族の物質文化の多様性や歴史性について考える機会を提供することを狙いとしていた。山路は近年関心を集めている原住民族の工芸について、従来、自民族内部で伝承されてきた様式である「エスニック芸術」が伝統を活かしながら、より多くの人たちの共感を得るためにさらに普遍的な芸術の創造を求めるための飛躍が営

まれているということ、タイヤルの織布の製作に関する事例調査をもとにして述べ、その背景には複雑な民族構成をとる台湾の市場経済の存在があることを示唆している（山路 2009: 73-74）。しかしながら、山路が前提としてとらえている自民族内部で伝承されてきた様式が、それぞれの民族集団の内部でのみ生成されてきたものであるかは検討の余地があるだろう。刺繍や彫刻に用いられるパイワンの百歩蛇のモチーフやブユマの木彫に施される幾何学紋様は確かに、それぞれの民族集団に独特なものであり、他の民族集団との境界を読み取ることができるが、それらは部分的な要素にすぎない。現在、原住民族の人々が製作している衣類、装飾品、籐ならびに竹細工、木彫は過去から製作され続けてはいるが、一貫して同じ類いのものが変わらない方法によって、同一の製作者達、すなわち同一の民族によって作られ続けてきたとは限らないことに注意をはらっておくべきである。すなわち、原住民族の製作活動は、少なからず外部者からの影響を歴史的に受けてきた可能性が考えられる。そこで、原住民族の製作したものをとりまく外的な状況の歴史的な背景を整理しながら、物質文化をめぐる原住民族と外部者との関わりについて考えていく。

#### 2.4.1 日本統治時代における工芸としての認識

「僕は十七年来台湾の原住民族を研究して居るが、仕事は思った様に進歩して居ない。其の原因は色々あるが、その一例として近頃殊に強く感ぜられる事は、僕に本島人の知識が少いと云う事である。成程所謂高砂族は台湾の原住民族と呼ぶ丈もあって、本島人より先に土着して居た事は明であるが、現在、否相當過去の文化が、殊に物質文化が本島人の文化に可なり強く影響されて居る事を注意したい。而して夫れは布、利器、並に装飾品に於て著しい。従って高砂族在来の文化を研究するには、本島人の文化的影響をエリミネートしなければならぬ。即ち此處に本島人民俗の研究が必要になって来る。また本島人の文化が南支那其のままの文化と考える事は危険の様である。南支を研究すると同時に本島人を研究し、両者を詳細に比較する時、多くの重要な問題が発見される事を僕は予言したい。」（鹿野 1941: 1）

この文章は鹿野忠雄が、雑誌『民俗台湾』のある号の巻頭言によせたものである。台湾の原住民族の物質文化が本島人、すなわち漢族系住人の影響を受けて形成されていった可能性があることを鹿野がこの時代に認識していたことは慧眼であろう。原住民族の物質文化は彼らの社会の中だけで閉じた存在ではなく、様々な形態をとりながらつねに外部社会との相互作用の中で形成されていったものであり、それは現在も進行している現象と言っても過言ではない。

日本統治時代における原住民族の道具や衣服は、物質文化研究の対象であったり、

博物館展示のために収集対象となったり、珍品、奇品として個人の収集の対象とされていた。こうした物質文化への関心とは別に、原住民族への授産事業の対象として、その製作が奨励されたり、日本人による製作指導が行われたりもしていた。原住民族の物質文化を彼らの歴史的な系統や伝統的文化を具現するものとしてとらえ、それらを収集、研究する一方で、彼らのもの作りの技術や、製作物を工芸といった観点で評価し、それらを商品化させようとする動きがあったということである。とりわけ、織物や木彫、竹、籐細工の製作を振興するために各地に工芸指導所が開設され授産事業の一つとなっていた。たとえば、高雄州に1921年（大正10年）に設立されたアマワン工芸指導所では、木工や手芸が教授されていたことが知られている（鈴木1935）。

原住民族の物質文化を工芸としてとらえる視点は、日本において柳宗悦らが起こした「民芸運動」、すなわち、無名の作り手による焼き物、染織品、漆器、木竹工の日用品の中に美を見いだそうとする考え方にも通じるところがある。当初、台湾総督府臨時台湾旧慣調査会の調査官として原住民族の居住地へ赴き、後に南部のアマワン工芸所に指導者として赴任した小林保祥は、当該地域に居住していたパイワンの人々が従来、製作し利用してきた道具や衣服が、統治政策の地方への浸透によって、外来の製品に代替されていくことに対し、「工作の情熱は幼稚な経済関心に代り、伝統の芸術的天分は次第に稀薄に為つてゆくばかりである」（小林1944:4）と述べている。小林は、『番族慣習調査報告書第五卷（四冊）ばいわぬ族』の編纂の中心になった人物で、小林の妻である小林よしのもパイワンの織物と刺繍に関心をもち、村の老女たちから伝統的な機織りや刺繍を習い、後に指導所で伝統を生かした新しい工芸品の製作の指導に当たっている（松澤1998）。

この時期には、金関丈夫や池田敏雄らが編集の中心となった『民俗台湾』が発刊されている。『民俗台湾』には毎号、台湾の庶民の工芸品の解説が写真つきで掲載されており、原住民族のみならず、台湾における工芸の伝統が研究者や文筆家によってとりあげられる機会を得ていた。『民俗台湾』に関しては、その創刊に際して添えられた発刊の趣意をめぐって、台湾人である楊雲萍から痛烈な批判がよせられ、それに対する編集者の一人である金関の回答と、さらなる楊からの反応が紙上に掲載されたことで知られる。確かに発刊の趣意の内容は、皇民化によって失われていく台湾の民俗を客観的に調査、記録し、研究するということの重要性が説かれており、当事者、すなわち、文化の担い手である台湾人側からの反発は当然生じてもおかしくない内容であった。この問題については川村湊と国分直一との間で、同誌が台湾社会においてどのような意義を有するものであったかということについて論争が交わされた（川村1996; 国

分 1997)。

漢族系住人の物質文化や風俗慣習、文芸を主な対象としていた『民俗台湾』では、平埔族の物質文化や慣習はしばしばとりあげられていたが、原住民族のものについてはそれほど多くはとりあげられていない。しかしながら、記述された場合、その多くは、原住民族の物質文化を工芸という視点でとらえた内容のものが多かった。例えば、金関が「民芸解説」というコーナーでとりあげたパイワンの木匙によせられた文章には原住民族の物質文化を工芸という視点からとらえようとする意図が読み取れる。

「上の標本は最近台北市内の骨董店で得られたものである。だから出所は判らない。然しそのデザインや手法から見て、恐らく南部の高砂族パイワンの作品と考えて間違いのないらしい。柄のところはこの種族に付きものの蛇のデザインかと思われる。然しそれが別に蛇と考えなくても済むほどに変容されている。全体の形はどっしりとして重厚であり、原始芸術として軽蔑させる不均衡や稚拙さがもはや見えない。(中略) かうした用がすっかりデザインのうち溶け込んでいるのを見ると、こんな些細な様式にもかなり永い伝統があったことを感じさせる。」(金関 1942)

実はこの文章には当時の原住民族の道具や衣類がおかれていた社会的な状況をうかがえる部分がある。それは、この木匙を金関が得たのが台北の骨董店であり、その出所は木匙の形態上の特徴からパイワンのものであろうということを推定している点である。すなわち、金関はパイワンの人々がこの木匙を使っているのを実際に見て、この資料の解説を書いたのではないことには留意しておく必要がある。

原住民族が製作する道具や衣類、また考古学資料の類いは以前から骨董屋で売買されるようになっていたようである。例えば、台湾総督府博物館の資料収集を行っていたことで知られている尾崎秀真が、形質人類学者である松村瞭にあてた手紙には、骨董屋をめぐり珍しいものを購入していたことが次のように記されている。

「南部出張の際杉山君と二人例の台南の骨董屋を漁りたる時、其骨董屋に来合せたる人より、恒春にて道路開墾の際、土器の屑を掘出し其出土品を携え帰れる事ありと聞き、…」(松村 1927: 372)

金関が先の原稿をしたためた当時はさらに南部地域の原住民族の道具が台北の骨董屋で販売されるような流通の状況にいたっていたと考えられる。原住民族の製作するものの流通も、当時の彼らをとるまく外部者とは無関係には存在しえなかったということになる。原住民族の物質文化の動態には当時の漢族系住人や日本人が相当に関与していたと考えてよいであろう。原住民族が新たに製作していたものは、もちろん日常的に自分たちが使用するものもあったであろうが、日本人が行っていた授産事業を

通して工芸品として商品化されていたのである<sup>3)</sup>。一方で、原住民族の製作するものが工芸品として商品価値をもつことに乗じて、偽原住民工芸品も当時出回っていたようである。例えば、1933年2月1日の台湾日日新報には、屏東郡において、本島人大工をつかって原住民族の彫刻の偽物を製作し、油を塗布したりして、原住民族の製作品のようにみせかけてだまし売っていたグループが摘発された旨の次のような記事が掲載されている。

「本島人大工を使つて蕃産物に模倣した彫刻品を製作せしめ墨、油等を塗布し更に竈の上で燻らして一見蕃産品の如くに装ひ州下一園に売却したその価格は七百余圓に上りだまされた被害者の中には知名の人もあるが犯人は全部検挙されこの程身柄は台南に押送された。」

被害者にも知名の人があったという記述からも理解できるのは、原住民族の製作物の愛好家が台湾の各地に存在していたということである。

#### 2.4.2 原始芸術と工芸

第二次世界大戦後は研究者のみならず、特に市井の収集家による、それも比較的古い原住民族の道具や衣類の収集、購入が行われていった。彼らは収集品をもとに私設の展示室を設けたり、博物館を開設することも少なくなかった。

一方で、台湾の著しい経済成長にともなう生活形態の変化の中で、もの作りは原住民族の人々の日常からだんだんと離れていった。古い器物は売却され、もの作りを続けていった人たちは、自分たちが日常に使用する道具や衣服を製作するというよりは、土産物になる安価な工芸品を外部者に販売するためにもものを作るということも少なくなかったようである。この背景には1960年代くらいからはじまった、いわゆる山地観光の影響と原住民族の就業に対する政策も影響していたとされている(廬2007: 16-19, 46-48)。当時の山地観光の現場では、原住民族の人々が製作したものが、東南アジアやアフリカから仕入れられた土産物とあまり区別されることなく販売されていたり、「山地衣服」や「山地歌舞」に代表されるような品物が、原住民族の固定化されたイメージとともに台湾社会に浸透していた。

こうした状況に反動するかのようには、原住民族の物質文化が芸術という観点から評価される動きもこの時期に見られる。このことは、まさに1980年代後半に交わされた「プリミティズム論争」と共通した課題を内包していた。例えば、台湾の著名な油絵画家である陳正雄は原住民族の物質文化に魅せられ、各地の資料を収集し、それを展示する台湾原始芸術館を設立した。その展示図録の中で、彼はピカソやモジリアー

ニが、アフリカの仮面や彫像に創作活動のインスピレーションを得たことを例にあげ、原住民族の原始芸術が自らの創作活動の新たな展開につながる可能性があるだろうということを述べている（陳正雄 1978: 5-6）。一方で、この図録に巻頭言をよせた陳奇祿は、原始芸術という用語こそ用いてはいるが、西洋美術と原住民族の物質文化という対比的な構図はとっておらず、原住民族の人々が作り出してきたもの自体にそなわる美しさを評価している（陳奇祿 1978: 4-5）。原住民族が原始な人々と同様な創作活動を行うという表現も用いてはいるが、この博物館の名称が原始美術館ということで、原始（primitive）という用語を用いなければならなかった事情は理解できる。

こうした状況に変化が生じていくのが、1980年代半ば以降、すなわち、原住民権利促進会が結成され、当時の原住民族の社会的位置づけに対する原住民族自身からの強烈な問いかけが社会に発信された時期である。原始芸術というとらえ方に対して原住民族の手による工芸や芸術としての物質文化の再認識が求められていったと考えてよい。そうした中から、原住民作家もしくは原住民芸術家とよばれる人たちが出てくることになる。当時、こうした作家によって制作される作品には、自分自身の属する民族集団に特徴的とされるモチーフを用いた作品が多く、それらの作品の種類や表象された内容と制作者との間には民族集団の対応関係を読み取ることができる。パイワンの彫刻家である撒古流の創作活動はそうした原住民芸術家の営為として代表的な例と言えるであろう。

1990年代にはいり、原住民族という呼称が社会的に定着しはじめ、総体としての原住民族意識が当事者側からも表明される機会が増えていった。これに呼応するかのように、国家と原住民族との関係に変化が生じはじめ、原住民族のもの作りにも様々な意味が付加されるようになっていった。就業のための訓練や手に職をつけるための工芸という位置づけから文化産業の創出とそれを通じた地域経済の振興という政策上の変換が1990年代前半になされていくことになる。一方で、工芸が産業化されることによって生じたのが、漢族系住人がより深く原住民族のもの作りに関わっていくという状況であろう。

例えば、筆者自身が調査を行ってきた東部パイワンの女性は、生活のために刺繍細工を製作し販売する工作室を1970年代から経営してきた。彼女によれば、1990年後半から商品がよく売れるようになり、原住民族の人々が製作する刺繍や木彫を原住民族文化として行政側が展示会や出版物で紹介するようになったという。彼女が製作した刺繍製品も公的な展示会で好評を博し、こうした評価を重ねた結果、彼女は2007年には「台湾工芸之家」に認定された。これは、国立台湾工芸研究所が主宰する台湾

の工芸作家の認定事業である。これを契機に彼女の作品は国際的に台湾の伝統工芸の一つとして紹介されるようになった。例えば、2008年9月に彼女の作品がフランスのデザイン家具に関わる展覧会に出品されたのはその典型的な出来事である。作品は彼女が単独で制作したものではなく、「工芸時尚-yii」という団体に所属する漢族系のデザイナーからの依頼で、彼が制作した樹脂製の籠の型に彼女がクロスステッチを施したものであった。

「工芸時尚-yii」は、国立台湾工芸研究所と台湾創意設計中心が共同で2007年に立ちあげた設計制作集団である。後者は2003年に經濟部が主導して立ちあげた財団法人で、国際競争力をもつデザインを台湾から発信することを目的としている。「工芸時尚-yii」の目的には本来の台湾の工芸を活かし、従来の価値観にとらわれない台湾の独自のデザインを生みだしていくということがかけられており、比較的若い世代のデザイナーが所属している。原住民族と漢族系住人との協同で制作された作品がこうした背景で国際的な舞台上で登場していったことは興味深い。

以上のように、台湾の原住民族の物質文化は、外部社会によって工芸や原始芸術といった位置づけがなされるとともに、作り手である原住民族側にとっても、日常生活に使用する道具から商品、そして彼らの文化を象徴する作品へと、そのとらえられかたが時代とともに変化してきたと言ってもよい。現在の原住民族が製作する工芸品が従前で示してきたように、日本人や漢族系住人の影響を受けながら、現在の脈絡にあわせた創作性が加わったものであると解釈するならば、博物館に収集されてきた資料は現在の工芸の動態を理解するうえで重要な意味をもつと考えられる。

## 2.5 文化的営為としての生業活動

原住民族の人々は居住している地域による多少の差異はあるものの、焼畑を中心とする農耕と狩猟活動もしくは漁撈活動を基本的な生業活動としてきた。日本統治時代には、授産事業として農業指導が盛んに行われ、水稲稲作や畜産が奨励される一方で、焼畑によるアワの栽培やサトイモやヤマノイモといった根菜類の栽培も継続して行われていた。また、日本統治時代には狩猟に際して用いる銃器は日本の警察が管理しており、原住民族の人々が狩猟活動を行う際には、それらが一定期間貸し出されるという方法がとられ、基本的には彼らの慣習的な生業活動としての狩猟活動は継続的に行われていた。

こうした状況は、中華民国の施政下において徐々に変化していくことになる。貨幣経済の浸透は彼らに慣習的な生業活動にもとづく自給自足の経済生活から賃金労働を

ともなう生活への変更を余儀なくさせることになった。また、環境保護政策のために、原住民族の人々の居住地では基本的に狩猟活動が禁止されると同時に、日本統治時代に彼らが利用していた山間部の「蕃人所要地」は山地保留区と名称が変わったものの、その70%以上が林業用地に設定され、原住民族による利用が制限された（陳元陽・堺 1996: 64）。とりわけ、国家公園に指定された地域は、狩猟活動や植物の採集活動、農耕活動も禁止され、それらの土地を利用していた原住民族の慣習的な生業活動は必然的に衰退していった。

原住民族にとって生業活動の経済的な意味が弱まっていく一方で、狩猟活動そのものや焼畑農耕で栽培されるアワ、さらにアワから醸されるアワ酒やそれらを用いた料理は漢族系住人からは原住民族に特有なもののみなされていた。もっとも、こうした原住民族に対するイメージは漢族系住人だけが有していたものではない。日本統治時代から原住民族は山岳地域に居住し、狩猟活動や農耕活動を生業にするというイメージはあったと考えてよいであろう。

外部からのこうした見方に対して、原住民族自身が慣習的な生業活動を単なる経済活動としてではなく、文化的な行為として認識する状況が、やはり1980年代後半から生まれていった。原住民文学の旗手とも言えるタイヤルのワリス・ノカンが1990年に創刊した雑誌に『獵人文化』という名前を与えたことはその象徴とも言えるだろう。原住民文化運動の実践を目的とした同誌の名前に原住民という用語ではなく、獵人という言葉が使用されたことは、狩猟が原住民文化の一翼をなす行為であると考えられていたことを物語っている。こうした傾向は文芸や映画、博物館の展示といった、文化の表象行為に強く見られる。例えば、国家公園設立によって狩猟活動が厳格に禁止されたことへの反駁となっていることが指摘されている（下村 2002: 313）。ブヌンの作家トパス・タナピマが1986年に発表した作品のタイトルは『最後の獵人』とされ、原住民族の居住地に対する道路建設等の開発を批判的に描いたパイワンのサキヌが著した小説で、同名で映画にもなった作品の題名は、『山猪・飛鼠・撒可努』は、パイワンの人々をはじめ、原住民族の人々が狩猟の対象としてきた動物の名前が用いられており、狩猟活動や野生動物が原住民族と深く結びついてきた存在であることが示されている。

原住民族が慣習的な生業活動である狩猟活動を文化的な行為として強調することによって、狩猟活動の全面的な禁止から、原住民族の儀礼や祭典に供するための獲物を捕獲する場合には、事前に申請をすることによって狩猟活動が認められるなどの措置がとられるようになっていった。また、衰退の一途をたどっていたアワ栽培を復興

し、アワ酒や菓子類の商品を中心とした産業化の取り組みが行われている地域もあり、原住民族の慣習的な生業活動が社会的にも経済的にも見直される状況が生まれてきているのである。

### 3 台湾における博物館と原住民族文化との接点

前章では、台湾における原住民族をとりまくいくつかの社会的課題について、順益特別展示の展示構成の背景となったものを中心に記述してきた。これらの課題は台湾における博物館でも少なからず意識されてきた。日本統治時代に収集された資料が所蔵されている国立台湾博物館や国立台湾大学人類学系の博物館では、平埔族に関連した展示会や研究書の出版が行われ、平埔族の歴史について、物質文化を通してひもとうとする動きが顕著となっている（胡・崔 1998; 呉 2009）。また、国立故宮博物院（以下、故宮）が館蔵の原住民族に関連した歴史資料を扱った企画展示会を行ったことは、中華文明を主題にしてきた故宮が台湾を強く意識しはじめると同時に、原住民族を主題にした展示会が故宮という舞台にふさわしいものであると認めたことを物語っている（馮 2006）。いずれにせよ、多くの博物館が、原住民族文化や原住民族に関する課題について独自の取り組みを行うような社会的環境が整ってきたのである。すなわち、原住民族の歴史や文化の存在が無視できないものであるという認識が台湾社会の中で高まってきたと言ってもよい。

そこで、本章では今回の展示会が開催された順益博物館について記述しながら、台湾における他の博物館の原住民族に関する展示会と順益特別展示との差異について説明を行う。次に博物館と原住民族との協同が現在どのように台湾において展開しているかについて、国立台湾史前文化博物館（以下、史前館）とタイヤルの女性が行った原住民族の衣服の復元プロジェクトを一つの事例として紹介する。台湾における原住民族文化が博物館という施設と密接に結びついている様相を明らかにしておくことが本章のねらいである。

#### 3.1 順益台湾原住民博物館

順益博物館は、日本の自動車企業の台湾における現地代理店を中心とした企業グループがメセナ活動として 1994 年に設立した博物館である。運営は財団法人が行っており、博物館に加えて幼稚園等の教育施設の経営も行っている。博物館の収蔵資料ならびに展示品は法人の理事長である林清富氏の個人コレクションが基礎となってい

て、約 1,100 点の台湾の原住民族に関する資料が収蔵されている（張 1999: 27）。展示場は地下 1 階から地上 3 階まであり、エントランスとなる 1 階部分には原住民族全体の紹介とミュージアムショップ、2 階部分には「生活と器具」をテーマとして、各民族集団の家屋模型や土器、籐細工、狩猟用具や織機といった生活用具が中心に展示されている。3 階は「服飾と文化」というテーマで、衣類やトンボ玉を中心とする装飾品が展示され、衣類製作の映像等がモニターで放映されている。地下 1 階は「信仰と生活」を主題にして、信仰や儀礼に関連した資料が展示されると同時に、原住民族の歴史を解説したパネルが設置されている。また、地下 1 階には特別展示室と講義室が設置されており、特別展や企画展の開催や講演会等が実施されている。

順益博物館の設置目的はかなり明快であり、展示、教育、研究、収蔵という 4 つの柱をもとにして、「大衆」と「学術」の相互的な結びつきを深めようというところにある（張 1999: 7）。そのための博物館事業を積極的に行っており、常設展示だけでなく、企画展示会や「DIY 教室」とよばれるワークショップを重ねると同時に、原住民族の集落への研修や集落との共催展示会の実施等、来館者と原住民族重視の姿勢を一貫して取り続けてきた。また、原住民族学生への奨学金の支給、研究機関や大学への研究費の寄付、原住民族関連出版物の発行など、これまでに台湾の原住民族文化の振興や研究に与えた影響や貢献はかなり大きいと言える。

一方で、順益博物館の出版物や通常の博物館事業からは必ずしも直接的にはうかがえないある特徴が、節目毎に行われてきた特別展示会に備わっていることを読み取ることができる。それは、台湾内では目にするのできない種類の資料でかつ歴史的な脈絡が明らかな資料を海外の博物館などから借り出して展示するというのである。順益博物館はこれまでに大きな特別展示会を 3 回経験している。1994 年の開館記念展示会では、東京大学総合研究資料館（当時）で復元された鳥居が撮影した乾板写真を中心にした「跨越世紀の影像 1：鳥居龍蔵眼中的台湾原住民」（世紀をこえた映像——鳥居龍蔵の見た台湾原住民）、2004 年の十周年記念展示会では、19 世紀の後半に台湾で布教活動を行った、ジョージ・マックイが収集した資料をカナダから借用して展示した「馬偕博士収蔵台湾原住民文物展」（マックイ博士収蔵台湾原住民資料展）、そして、民博から日本統治時代に収集された資料を借用して行った「百年來の凝視」（百年の時をこえて）が 2009 年に計画されたのであった。

台湾で原住民族を対象とした博物館を新たに建設したり、展示会を行う場合に必ずと言ってよいほど生じるのが資料収集に関わる問題である。現在の原住民族に関連した資料をその脈絡を明らかにしながら収集できるのは、木彫や籐細工、織物や衣類、

装飾品といった現在でもその製作活動が行われている種類のものに限定されてしまう。収集できる資料が限定される場合、展示の主題となる範囲もそれに合わせたものになり、それ以外の部分をパネルや映像に頼る展示にならざるをえない。とりわけ、原住民族の人々の歴史に関わる展示を行う上での制限は大きくなる。順益博物館のように収蔵資料がそれほど多くはなく、比較的新しい時期に収集されたものの占める割合が高い博物館の場合、自館の資料のみで歴史的に厚みのある展示を行うことは容易ではない。一方で、順益博物館の資料は保存状態が全般的に良好であると同時に、個人コレクターの収集品にはよく見られる、いわゆる「1点もの」の資料も少なくないことから、テーマを明確にしなが、資料そのものを丁寧に紹介する展示が常設展示では実現している。

台湾の中では国立台湾博物館や国立台湾大学人類学系といった、日本統治時代から継続している少数の博物館や施設にしか収蔵されておらず、通常では台湾の人々が目にする機会の限られた原住民族の歴史的な資料を、海外に求めることによって、常設展示とコントラストを効かせた歴史展示を特別展示会で展開してきたのである。同時に、国際性をもった展示会を実施することによって、原住民族文化が海外とつながっていくうえでの窓口となる機能も果たしてきたと言える。

### 3.2 博物館と原住民族との協同の事例

前章では、日本統治時代に工芸という概念が原住民族のもの作りにとりこまれていった過程、外部者から原始芸術と見なされた状況から、より自発的な原住民族芸術へと移行する過程、そして、パイワンの刺繍作家の女性と平地人デザイナーとの協同を通して、新たな創作活動が、民族間の垣根を越えて、営まれはじめていることについて記述を行ってきた。長らく原住民族社会にねざしてきた物質文化の伝統はそれぞれの時代に応じたものを生みだしてきたと言ってもよいであろう。そうしたことから考えられるのは、博物館に収蔵されてきた歴史性を有する資料は、物質文化を通した原住民族と外部社会との関係にまつわる歴史的な動態を理解する重要な手がかりになることが確かだということである。

一般に博物館資料は研究者の手によって調査、分析が行われることになる。民族資料は、人類学や民族学、歴史学を専門とする研究者が扱うことが多い。また被服学や科学技術史、物性科学といった分野の研究者も民族資料を分析の対象としてきた。これらから得られる研究成果はそれぞれの方法論にしたがった学術的な意味における客観的な資料の解釈と言える。これに対して、それらの資料を実際に製作し使用してき

た人々、さらにはそれらの人々の子孫にあたる人々は、学術上の客観的な解釈とは異なる意味を資料に与える可能性は少なくない。また、学術研究の成果に対しても同意や反駁といった様々な評価が与えられることは十分に考えられる。一方で、研究者と資料に関わる当事者とが協同して博物館の資料を扱うことによって、これまでになく新たな展開が生じる可能性は否定できない。そうした試みが原住民族と台湾の博物館との協同で実践されてきた。史前館とタイヤルの女性工芸作家である尤瑪達陸氏（以下、尤瑪）らがともに進めてきた「泰雅族伝統服飾及相關器物重製収蔵計画」は、原住民族でもの作りになずさわっている人々が博物館の資料を観察しながら、現在の製作活動と博物館資料とを有機的に連結させ、そこから新たな創作を生みだしていった例である。ここでは、この計画の内容について記述しながら、博物館資料が現在の原住民族の人々のもの作りに対して有する意味について考えることにする。

尤瑪は1963年台湾北部の苗栗県に生まれた。父親は大陸の湖南省出身であり、母親はタイヤルの女性である。大学卒業後、台中の公的機関に公務員として勤務し、主として原住民族の衣服の収集や購入といった仕事になずさわっていた。その後、中学校で教職に就いた後に1990年代の初頭には自らも機織りをはじめ、タイヤルの伝統的な服飾文化を自らも伝えていくことを実践しはじめた。この時期は原住民族の人々にとって、創作活動が盛んになった1980年代半ばと1990年代半ばの間に相当する。史前館において、尤瑪とともにタイヤルの服飾文化振興の計画を進めた林志興は、台湾の原住民族のアイデンティティ研究を重ねていた謝世忠の言葉を借りながら、1980年代半ばは、まさに原住民族の権利促進運動が台湾社会において産声をあげた時期に相当し、1990年代半ばは、原住民族の存在を国家として尊重することが明確にされた時期であったと創作活動が展開していった時代的背景を解釈している（林志興2008: 7）。

史前館は1992年に開館した台湾でも新しい国立博物館であり、収集する資料はいわゆる歴史的な古物ばかりは期待できないという事情があった<sup>4)</sup>。そこで、彼らが考えたのは原住民族の文化の未来に目を向けようということであった。すなわち、現在の時点で得ることのできる原住民族の知識や技術をそれぞれの土地に赴いて記録し、国内外の博物館に収蔵されている過去に製作された資料を調査することによって、伝統的な技術の復元とその継承を行うという意図が含まれていた（方2008: 13）。「泰雅族伝統服飾及相關器物重製収蔵計画」はこうした博物館側の事情と、尤瑪が目指していた自民族の伝統的な服飾技術の継承への思いとが出会って開始されたという経緯があった（方2008: 16）。

彼らが複製ではなく重製という言葉を用いていることには留意しておかなければならない。複製とは文字通りコピーである。彼らが定義した重製は、ものの製作において新たな技術や素材を使用することを厭わないという態度であり、製作されるものは新たな創造であると認識されていた。これについては様々な議論があったとされているが、この計画の目的は、ものを作る過程を知ることにより、祖先が新たな知識を獲得した過程に接近し、過去と現在とをつむぎあわせるということであり、重製を積極的に受容するという共通の理解があった（方 2008: 20）。興味深いのは、重製という考え方が生まれた背景には、民族資料の複製が倫理的に許容されるか否かという議論が存在していたことである（方 2008: 21）。現在の著作権制度にしたがった場合、作品でないものの複製は可能ではあるだろうが、ある特定の民族に固有なものを、外部者が複製することが適切か否かという問題はとりわけ民族資料が、当事者である民族集団の知的財産であるということに鑑みた場合には倫理的に慎重になる必要があるという点でも注目に値するであろう。すでに台湾では原住民族の知的財産に関わる法律「原住民族伝統智慧創作保護条例」が著作権法とは別途制定されており、今後、民族集団の知的財産をめぐる社会的な動きが展開していく事は十分に予想される。また、このことは博物館にとっても重要な意味を持つ。例えば、パイワンに特有の百歩蛇のモチーフを他の民族に属する者がその製作物に取り込むことが適切か否かといったこととは明らかに次元の異なる問題を含んでいる。すなわち、博物館や研究者が実物の資料ではなく、民族資料の複製品を製作し、それらを展示することの倫理性や真正性（authenticity）が問われていたと言える。

重製計画の中で重視されたのが、博物館に収蔵されている資料の調査であった。標本資料がなかなか入手できない場合でも、映像記録については、複写されたものを容易に製作することが可能であり、とりわけ、台湾の原住民族の映像記録は第二次世界大戦以前のもので白黒写真を中心に台湾には比較的多く流通している。こうした記録から、今回のような衣類を復元しようとした場合、その立体構造や織りの構造、彩色について得られる情報は必ずしも豊富とは言えない。技術的な特徴が十分に理解できる点、資料のもつ色や質感を把握しやすいという点では、実物の標本資料が果たす役割は非常に大きい。方の言を借りるならば、標本資料を調査する大きな意義とは「平面を立体に、白黒に彩りを」ということが、博物館資料の調査によって可能になるということである（方 2008: 18）。

一方で、制作者の立場にある尤瑪にとっても博物館資料のもつ重要性は十分に認識されていた。彼女が最初に調査を行ったのは、中央研究院の民族学研究所に併設され

ている博物館の資料であった。この博物館に収蔵されていた資料は、1950年代に収集された南澳地方のタイヤルのものが中心であった。それらの地域の人類学的な研究が行われたときに並行して収集されたものであり、関連した民族誌の記載が豊富であったことが、当該地域の服飾の地域性を理解するうえできわめて有意義であったということが尤瑪によって述べられている（尤瑪 2008: 30）。また、尤瑪は1994年には輔仁大学の織品服装研究所の修士課程に入学していることにも留意しておくべきであろう。このことによって、博物館資料の織物に用いられた製作技術や様式を、第三者にも理解可能な形で記録する方法を彼女が取得したのであった。設計図や型紙がもともと存在しない原住民族の織布について、それらがどのような技術や様式をもって製作されているかということについては、タイヤルの織布の製作技術を習得していなければ理解することは容易ではない。換言すれば、原住民族の製作技術の継承は、伝える側と伝えられる側とが同じ技術や知識を共有することによって果たされることになる。尤瑪が被服学の専門的な知識を学びとっていったことは、彼女と史前館とをむすびつける上で非常に大きな意義をもっていたと考えられる。

こうした条件が整ったうえで、尤瑪らは台湾内の博物館の収蔵資料調査を、国立台湾博物館、国立自然科学博物館、国史館台湾文献館、台湾大学人類学系博物館等を訪れて行った。そして、2007年には天理参考館ならびに民博に調査に訪れたのであった<sup>5)</sup>。彼らにとって過去の資料と向き合うことは、単に技術的な特徴を調査することにとどまらないという。祖先が作り遺した文化資産を目前にすると、祖先と自らの間に架橋し、祖先の魂と向き合うことによって、衣類制作のための知識が血肉化すると述べている（尤瑪 2008: 30-31）。2004年の10月に本格的に開始されたこの計画では、3年間の間にタイヤルの衣服217件が創作された。彼女たちの成果は『重現泰雅』という標題の出版物としても刊行されている。重現という言葉をもって、新たなものを創りだしていくという意味をうちだしていることは言うまでもない。

尤瑪と史前館とによる重製計画は、博物館の資料が原住民族の文化的な営みを発展させていくためにいくばくかの貢献を果たしうることを示した一つの例であろう。こうしたことは台湾の原住民族にかぎらず、他の国や地域でも行われうることを考えられる。こうした状況に対応するために、博物館側は収蔵資料に関連した情報を十分に整備しておくと同時にそれらを可能なかぎり社会に開いていくことが求められていることが理解できる。

## 4 民博の台湾原住民族関連資料とそれらをめぐる研究者の営み

民博における台湾関係資料は、現在約5,600点にのぼっている。その大半が原住民族に関連したものであり、そのうちわけは、旧東京大学理学部人類学教室に保管されてきた明治、大正時代を中心に収集された民族学資料（以下、東大資料）が855点、大正時代に渋沢敬三が創設したアチック・ミュージアムの資料ならびに民族学会附属民族学博物館の資料をひきついで旧文部省資料館が保管してきた資料（以下、旧文部省資料）が872点、2,444点がのちに民博が受け入れた瀬川孝吉氏のコレクション（以下、瀬川コレクション）、残りがその他の購入や寄贈によって受け入れた資料である。こうした標本資料に加えて、戦前に撮影された写真資料（小林保祥氏映像資料等）、馬淵東一アーカイブ等に含まれるフィールドノート類、戦後に民博の映像取材で撮影された映像記録等、台湾原住民族に関する多様な学術資料が民博には所蔵されており、国内外の研究者の共同利用に貢献を果たしてきた。今回の順益特別展示に出展された資料は基本的に東大資料、旧文部省資料、そして瀬川コレクションの中に含まれていた。

本章では、民博に収蔵されている台湾原住民族に関連した資料がどのような背景をもって収集されていたのかを、原住民族の物質文化にむけられていた研究者や収集者の視点もあわせて記述していくことにする。

### 4.1 東大資料と鳥居龍蔵

原住民族の物質文化が外部社会による関心をもって見いだされていくのは主として19世紀後半以降のことである。清王朝の衰退にあわせて、清朝の統治下にあった台湾は海上の要所として開放がもとめられ、安平（現、台南）、打狗（現、高雄）、鷓籠（現、基隆）、滬尾（現、淡水・台北）が通商港として開港させられていった。その結果、海外からの来訪者の数が増えていったことがその要因となったと考えてよいであろう。もちろん、それ以前にも外部社会と原住民族社会との間で、物質文化に関わる相互作用は存在していた。しかしながら、化外之地と歴代中国王朝から目されていた台湾の土着の住人である原住民族の物質文化を貴重なものとして外部者が扱っていたとは考えにくい。原住民族社会から外部社会へのものの流れは、シカ皮や漢方の材料となる動植物といった原料や素材として利用されるものを中心であり、原住民族が製作した道具や衣服が外部社会に大量に輸出されたり、彼らの物質文化に関心が注が

れ、彼らの製作したものが収集されたりしたことを示す記録は管見の限りほとんど残っていない。逆に、原住民族社会には、外来の様々なものが移入されていたことはこれまでもしばしば指摘されてきた。

日本統治時代以前の原住民族社会の中に、外来のものが導入されていく最も大きな要因となっていたのは、西部地域の漢族系住人もしくは大陸中国側の漢族系の人々と原住民族との交渉や交易であった。こうした課題について、松澤貝子は南部のパイワン社会における首長家や貴族階級に継承されていく稀少財を例にとり、漢族との交易活動を通じた原住民族社会への外来品の導入が彼らの社会の階層化につながっていった可能性について言及している（松澤 1991）。また宮岡真央子は中部ツォウの人々に対して平地に住む漢族系の人々が支払っていた蕃租が後々、ツォウの人々が周辺の漢族系住人の居所に赴き、米や餅、また火薬や鉄器などを土産として持ち帰る饗応として残っていったことを指摘している（宮岡 2001）。

19世紀以降の外部に開かれた台湾にやってきた宣教師や旅行者、また民族学者や歴史研究者は、原住民族の物質文化や台湾から出土される考古学遺物に少なからず関心を示していった。こうした現象はもちろん台湾にかぎらず、植民地支配が行われた地域では比較的よく見られることである（O'Hanlon and Welsch 2000）。民博に所蔵されているジョージ・ブラウンコレクションが形成された過程も類似した例であるだろうし、ヨーロッパの主要な博物館に収蔵され、展示されている考古学資料等はこの時期に植民地から宗主国に持ち出されたものが少なくない。

一方で、大規模な遺跡や歴史的建造物がそれほど多くない台湾を訪れた外来者にとって、原住民族の人々が使用していた道具や衣類はその土地の風土や歴史に固有なものとして目にとまっていた可能性は高い。とりわけ、台湾に居住する原住民族の人々に関する知識は、日本も含めた諸外国にはそれほど普及しておらず、原住民族の物質文化は、首狩りを慣行している未開の民族の珍奇な文物として、他の地域における土着の人々の物質文化に匹敵する印象を外来者に抱かせた可能性は十分に考えられる。

19世紀末から20世紀初頭にかけて布教活動を行なったカナダのジョージ・マッカイ（George Mackay: 1844–1901）は、この時期の比較的初期に台湾の物質文化に関心をよせた人物である。彼は台北の淡水を拠点として、1871年から1901年にわたる30年間、主として台湾北部においてキリスト教の布教活動と歯科治療を行った。同時に原住民族や漢族系住人に関連した資料の収集を行い、淡水に規模は小さいながらも博物館を設立している。北部を中心に活動を行っていたこともあり、当時、北部地域に居住していたクヴァランやケタガランといった平埔族の人々との接触が比較的多く、

とりわけ、宗教に関する資料が意識的に収集されたようである（胡 2001: 70-71）。

ところで、この博物館には 1896 年 12 月に日本の乃木希典総督が見学を訪れたという記録が残されている（林昌華 2001: 57）。同年 10 月に、乃木は「綏撫」理蕃政策を提出し、これを受けて、翌 11 月に民政局殖産部からこの政策を推進するために、「蕃人」に関する内情調査を行う必要があることが各撫墾署長に通知された。その中の具体的な作業に、「蕃人生活状況の理解」と「土俗標本の収集」があったことは興味深い事実である（陳文玲 1997: 9）。マッカイが収集した資料は彼がカナダに一時帰国する際に持ち帰ったり、死後にカナダに搬送されたために、台湾にはほとんど残されていない。先述したように、順益博物館はマッカイ博士の資料を借りうけ、十周年記念特別展示会を開催したのであった。

様々な国や地域から台湾を訪れた人々の多くは、原住民族も含めた台湾の物質文化に少なからず関心を持っていたが、やはり、原住民族の物質文化について最も関心をよせ、学術調査や収集活動を盛んに行ったのは、台湾の本格的な植民地統治を開始した日本からやってきた人々であった。それらには、総督府の官吏、軍人、旅行者、文筆家、そして民族学や考古学の研究者が含まれていた。

個人的な所蔵は別として、日本の公的な機関において原住民族の資料が収蔵されたのは、1867 年におこった台湾出兵がきっかけであった。この際に、台湾で収集された資料 16 件は当時の帝国博物館（現、東京国立博物館）に寄贈された（陳文玲 1997: 6）。その後、日清戦争の結果、1895 年に台湾が日本の植民地になったのを機に、台湾における学術調査が本格的に開始された。この時期に、台湾に赴いた鳥居龍蔵、森丑之助、伊能嘉矩らは、台湾の原住民族が居住している地域を調査しながら、彼らの使用している道具や衣服などを収集していった。いわゆる学術調査による収集活動が開始されたことになる。

学術調査による収集が行われた一方で、総督府の関係者も原住民族の資料を収集し、それらを日本に持ち帰っていた。確かに、伊能や森も総督府の役人として台湾にいたのだが、彼らは囑託職員であり、もともとは民族学や人類学といった学術的関心をもって収集にあたっていたと言える。それに対して、東京国立博物館に現在、所蔵されている原住民族に関連した資料には、長尾義虎、徳川頼貞といった軍人や華族、また発足したばかりの台湾総督府民政局からの資料が含まれている（陳文玲 1997: 6）。

鳥居、伊能、森は台湾の原住民族研究のパイオニアと称されることもあり、その研究活動は一定の評価を得てきた（笠原 2009a: 33-43）。

森は 1895 年に陸軍付きの通訳として台湾に渡って以降、日本人にとってはほとん

ど未知の土地であった山岳地域を踏査していった（楊 2005）。ほぼ同じ時期に東京帝国大学からの派遣で台湾の民族学調査に訪れていた鳥居と出会い、彼の調査助手をつとめるうちに、原住民族の調査や研究に目覚めるようになった。森は殖産局附属博物館ならびに総督府博物館の原住民族関連の展示の開設に尽力し、彼の収集した資料は総督府博物館の初期の展示場を飾ることになる。現在、森の収集した資料は国立台湾博物館に収蔵されている。

森とならんで現在の国立台湾博物館に収蔵されている原住民族関連の資料を収集した人物に尾崎秀真がいる。尾崎は 1900 年に台湾に渡り、以後、台湾日日新報の記者をしたり、文筆業にたずさわりながら、総督府博物館の囑託として資料の収集活動に参加した。尾崎は台湾各地の骨董屋を通して資料を入手したり、考古学の遺跡から出土した資料に自分の名前をカタカナで注記するなどしていたことから、研究者からの評価もまちまちなようである（宮本・瀬川・馬淵 1987: 167-171）。しかしながら、尾崎がもっとも熱心に収集していたのは熟蕃、いわゆる平埔族の衣類であったとされており（宮本・瀬川・馬淵 1987: 167）、これらの資料は、平埔族の民族認定の問題が台湾で本格的に議論されはじめている現在、非常に重要な意味をもつ資料となっている。

伊能は 1895 年から 10 年間余りを台湾総督府の下級官吏として過ごし、漢籍を中心とする文献資料の調査と現地調査を通して、原住民族の研究や台湾の歴史に関する研究を行った。伊能は、鳥居や当時、東大人類学教室を主宰していた坪井正五郎との親交も深く、『東京人類学会雑誌』には、伊能の台湾原住民族の物質文化に関する論文や資料報告が数多く発表されている。同時に伊能は原住民族に関連した標本資料を収集し、それらの大半を自身の故郷である岩手県遠野へ持ち帰った。その後、資料の一部が現在では遠野市立博物館および民博に収蔵されている。伊能が収集した資料の大部分は、1928 年に台北帝国大学の土俗人種学研究室が創設されたときに、教室の主任となった移川子之蔵らが遠野に赴き、研究のための標本資料として同研究室標本室に収蔵したいという申し出を彼の遺族に行なったことをきっかけに、再び台湾にもどり、1934 年に完成した同研究室の標本資料室に収蔵されることになった（宋 1998: viii）。

鳥居は 1896 年に最初の渡台を果たし、以後、4 回にわたり台湾調査を行った（野林 2004）。鳥居が収集した資料は日本が台湾統治をはじめて間もないころのものであり、とりわけ、紅頭嶼（現、蘭嶼）に居住するヤミの調査は、一ヶ所に相応の期間、逗留して行われた民族学の調査としては日本ではじめてのものと言ってよい。また、この時の調査をもとに書かれた『紅頭嶼土俗之調査報告』は日本で書かれた民族誌と

してはもっとも初期のものであろうし、東京帝国大学理科大学の紀要として出版された『人類学研究・台湾の原住民（二）ヤミ族』は海外における形質人類学の調査が総合的にまとめられたものとしてはそれまでに類をみない報告書となっている。また、それまで外部からの呼称がなかった彼らにヤミという名前をつけたのも鳥居であることはあまりにもよく知られていることである<sup>6)</sup>。

鳥居は当時、東大人類学教室で坪井に師事し、総合人類学を指向していた。すなわち、人間を形質と文化の両方の側面から調べようという態度である。このため、鳥居は原住民族の生体計測、基礎語彙の採集、衣食住を中心とした生活習慣など、様々な角度からの調査を行い記録を残した。特に、鳥居が記録として意識的に残していたのが写真と標本資料である。鳥居は現地調査に乾板写真機をもちこみ、当時の原住民族や平埔族、漢族系住人の様子を大量に撮影した（野林 1997）。鳥居は台湾調査の後、西南中国、朝鮮半島、モンゴルの調査でも写真機をたずさえて調査に入り、各地の民族の様子を記録しつづけた。当時の写真はガラス乾板を媒体に使用しており、それらは東京大学人類学教室ならびに総合研究資料館（当時）で保管されてきた。後に、これらのガラス乾板を復元する研究計画が進められ、多くの写真が復元された。順益博物館の開館記念展示会はこれらの古写真を台湾で紹介した初めての機会となり、台湾における古写真ブームを作るきっかけとなったと言っても過言ではないであろう。

東大資料における原住民族関連資料の中核をなすのは鳥居が収集した資料である。鳥居は踏査した場所を網羅するように民族資料や考古学資料の収集を行っていった。鳥居にとって、本格的な民族資料の収集は台湾で行ったものがはじめてであった。収集に関して特に方針や系統だてた計画があったような記録は残されていない。

また、東大資料の収集者には伊能嘉矩、松村瞭といった名前も見られる。先述したように、伊能は後の台北帝国大学土俗人種学研究室のコレクションの礎となった資料収集を行っていた。遠野に持ち帰ったもの以外は、東大人類学教室にも資料を置いていたことがうかがえる。一方で、鳥居や伊能以外の収集者が、台湾でどのような収集活動を行い、どのような経緯でそれらが東大資料となったかについては不明な点が多い。コレクションが形成された過程については今後も検証の必要がある。

以上のように時期を少しずつ異にしながら、教室内外の研究者によって原住民族に関連した資料が東大人類学教室に集められていった様子がうかがえる。これらの資料は長らく東大の人類学教室に保管されていたが、考古学資料をのぞく民族資料は民博に寄託資料としてその創設時に移管された。

## 4.2 旧文部省資料：鹿野忠雄と馬淵東一の収集

人類学の理論的な枠組が確立していった1920年代以降、それまで民族学や人類学の基軸を担っていた物質文化研究が後塵を拝するようになったことは否めないであろう（胡・崔1998:55）。しかしながら、台湾における原住民族の物質文化は依然として研究者たちを惹きつけていたし、それにともなった資料の収集も精力的に行なわれた。その背景となったのが、学術機関もしくはそれに相当する研究組織の存在であった。

当時の台湾は日本の研究者にとって異文化研究を行ううえでの格好のフィールドとなっていた。統治期間が長くなるにつれて、インフラが整備されるとともに治安が安定し、かつてピストルをたずさえて調査に向かうといった鳥居が調査していた時期とは状況が大きく異なっていた。当時、蕃地とよばれた原住民族の居住地には派出所が設けられ、日本人の巡査が駐在し、教育面では日本語が普及しはじめ、原住民族の人々とのコミュニケーションも容易になっていった。そうした調査環境の変化に加えて、1921年のアチック・ミュージアム・ソサエティ（以下、アチック）、1928年の台北帝国大学土俗人種学研究室の設立、そして日本民族学会が1934年に設立されるといった台湾内外における研究組織の整備は台湾における民族学の研究を進展させるとともに、物質文化研究の基礎となる資料の収集に日本の研究者を向かわせることになった。

台北帝国大学は、日本の第6番目の帝国大学として1928年に創立された。文政学部に設けられた土俗人種学研究室は、台湾ならびにさらに南方のアジア、太平洋地域の社会や文化を探求することを主たる研究課題としていた。

土俗人種学研究室には附属施設として標本室ならびに、薫蒸庫や暗室もそなえた標本整理室が設けられ、民族学における物質文化研究や考古学研究が可能な環境が整えられていた。先述したように、研究室には伊能が収集した原住民族や平埔族に関連した資料が遠野からもどされていた。伊能の収集資料から出発した土俗人種学研究室の標本資料はその後、同教室の助手であった宮本延人や台北医専の宮原敦、そして医専を経て台北帝国大学に着任した金関丈夫らが中心となって進めた台湾全土にわたる組織的な発掘調査で得られた考古学資料によって、その充実がはかられていくこととなる。発掘された遺跡の中には、南部の墾丁寮遺跡のように、第二次世界大戦後もひきつづき台湾の考古学者の関心を引きつづける重要な遺跡も少なからず含まれており、台湾全土の貴重な学術資料が土俗人種学研究室の標本資料室に収蔵されていった。

土俗人種学研究室が組織的に原住民族に関連した資料の収集を進めたのに対して、ならんで設立された言語学教室では、初代の主任教授であった小川尚義、小川の退職後、助教授として教室に着任した浅井恵倫が原住民族に関連した資料の収集を行っていた。言語学という分野の性格上、語彙集のような資料が中心であったが、浅井は写真や音声レコードも資料として残していた。これらの資料は、戦後、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下、AA研）に寄贈され、後に、台湾の原住民族の言語研究を行ってきた土田滋らを中心に「浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究」と称される研究プロジェクトによって、コレクションとしての整理と分析が行われた（三尾 2005: 5-10）。その成果はAA研ならびに民博における展示会を通して一般社会に公開されている（野林 2008）。

土俗人種学研究室が世に送り出した研究成果としては『台湾高砂族系統所属の研究』があまりにも有名であり、研究室を単位とした物質文化研究の成果はあまり目立ったものはない。教室のスタッフが個別の論文を学術雑誌などで発表する際に、標本室に収蔵されている資料が活用されていた程度である。しかしながら、標本室を整備し資料を受け入れていくという資料研究のための基盤づくりを同研究室が誠実に行っていったことには相応の評価が与えられるべきであろう。それは、第二次世界大戦が終了した後、日本統治時代に行われていた原住民族の調査や研究を、学術資料とともに継続していく拠点の一つとなったのが、土俗人種学研究室が発展的に改組されて設立した国立台湾大学文学部の考古人類学系であったことから十分に理解できる。戦後の台湾大学において、考古学も含めた人類学を牽引した研究者は、考古学者の宋文薫と民族学者の陳奇禄であろう。両者ともに、戦後しばらく台湾大学において、登用されていた宮本延人、国分直一、金関丈夫らとともに調査、研究を行った。後に、宋は台湾の旧石器時代遺跡である長浜遺跡や東海岸の卑南遺跡といった台湾を代表する遺跡の発掘をてがけ、台湾考古学の第一人者となる。また、国分は登用期間中に日本統治時代に行なわれた発掘調査の結果をまとめるかたわら、土俗人種学教室にあった資料に関する情報を整理し、資料の詳細なスケッチとあわせて、『台湾原住民族工芸図譜』をまとめている（国分 1981: 383-478）。このときにスケッチを担当したのが、当時はまだ雑誌記者であった陳奇禄である（国分 1981: 382）。彼は後に、この経験を生かし、台湾大学人類学系所蔵の資料を余すところなく活用した物質文化研究の大著、*Material Culture of the Formosan Aborigines* を上梓することになる。

台湾において、台北帝国大学の土俗人種学研究室や言語学教室が積極的に原住民族の調査、研究を進めていったのに対して、日本においても原住民族の物質文化研究に

深く関わりをもつ動きがあった。日本銀行総裁や大蔵大臣を歴任した日本経済の最大の指導者の一人である渋沢敬三が設立したアチックと、渋沢や白鳥庫吉らの尽力によって設立された日本民族学会とその附属施設である民族学会附属民族学博物館である。そして、アチックの収集活動を担ったのが鹿野忠雄であり、日本民族学会の収集活動を担ったのが馬淵東一であった。民族学会附属民族学博物館は1962年に閉館し、所蔵していた標本資料は国に寄付され文部省史料館（現、国文学研究資料館）におさめられた。

渋沢は当時、民族学や民俗学にたずさわっていた多くの研究者とともに、アチック同人（以下、AM同人）という組織をつくり、日本の民具資料や海外の民族資料の収集を行っていった。旧文部省資料の収集者には、鹿野忠雄、馬淵東一、古野清人といった台湾原住民民族研究の第一人者たちが名前を連ねており、原住民の資料が研究活動と直接つながるようなかたちで収集されていたことをうかがうことができる。なかでも、鹿野と馬淵はこれらの資料を収集する中心的な役割を担っていた。2人が収集活動に関わった時期はずれており、鹿野はアチック時代の1937年前後に、馬淵は博物館の開館を控えた1939年前後に収集活動を行った。

鹿野はもともと動物地理学を専攻しており、必ずしも原住民の文化や社会の研究が専門ではなかった。動物標本の採集を目的として山地を踏査するあいだに、原住民の人々と接する機会が増え、結果的には原住民の人々の文化や歴史の研究に傾倒していった。鹿野自身はアチックの正式なメンバーではなかったようであり、基本的には単独で調査や収集活動を行っていたが、AM同人であった小川徹、宮本馨太郎らを台湾に導き、彼らと協力しながら収集活動を行っている。この時には、宮本が得意とする16ミリフィルムで、屏東県のパイワンの人々の様子を映像で記録している。当時はすでに映画は珍しいものではなく、総督府の広報映画「南進台湾」（1941年頃）や台湾の原住民を主人公とした「サヨンの鐘」（1943年）のような大衆映画によって、原住民の様子は台湾のみならず日本にも映像によって伝えられる機会があった。しかしながら、民族誌映画という目的で原住民の様子が動画によって記録される機会はそれほどなかったと考えてよいだろう。

日本の民具研究にたずさわっていた宮本や小川にとって、台湾の原住民の調査や撮影は初めての体験であり、宮本の次の記述からわかるように、手探りの部分も相当あったようである。

「パイワン族の記録映画は大体次ぎの如き事項を撮影致しました。即ち、蕃社の環境、聚落概観・住居・耕作状態・蓑笠籠の製作・紡織・食事・服装・狩猟（出立姿）・川漁（エビ

筓)・舞踊・祈祷等であります。是等の項目は或は冗長であり或は不足であり、晴れたり曇つたりの霧に悩まされ、非常に不手際のものであります。撮影したフィルムは一六ミリで約一〇〇〇呎でした。此の編集は近日完了の予定であります。」(宮本 1937: 94)<sup>7)</sup>

この映像記録の一つの特徴は、鹿野が収集した民族資料と巧みに結びついているということであった。具体的には、鹿野が集めたいいくつかの資料が製作される過程を映像が克明にとらえているということである。鹿野は道具や手工芸品の製作プロセスを自身でも映像によってかなり意識的に記録していたようである。<sup>8)</sup> 鹿野がアチックに搬入した資料の数は、記録が残っているものだけでも約 800 点にのぼる (小川 1937: 114)。

民族学会附属民族学博物館の資料を引き継いだ文部省史料館の記録にもとづけば、民博に収蔵されている台湾関係資料のうち、馬淵の名前が収集者として記載されているものが、1938年に102件、1939年に277件を数えており、全体の3割にあたることがわかる。

馬淵は土俗人種学研究室の職をしりぞいた後、帝国学士院において高砂族慣習用語の仕事に従事していた。馬淵が、民族学会が新設した附属民族学博物館の展示資料の収集を行った背景には、帝国学士院に入るきっかけを作った古野清人の存在があった。古野は古くから渋沢と交流があり、アチックの例会にも出席していたようである。そうした縁もあり、古野と馬淵は、昭和12年に民族学会附属研究所の연구원となり、結果的には馬淵が中心となり、附属民族学博物館における台湾展示のための資料収集を行ったのであった。

大著『台湾高砂族系統所属の研究』の調査を中心となって担い<sup>9)</sup>、社会組織や系譜関係などに代表される原住民族文化の非物質的側面での研究成果が目立つ馬淵にあって、標本資料の収集という行為は意外であるようにも思われるのだが、実際のところ、馬淵の収集活動については興味深い点として、彼が資料に関する記述を克明に記録していることをあげることができる。

民博には馬淵の研究資料がアーカイブとして収蔵されており、台湾調査時代のフィールドノートが研究資料として閲覧可能となっている。B5サイズの大学ノートには調査した内容が克明に書き記されている。その中の1冊のフィールドノートの後半部分は物質文化という題名が付され、民族学会附属博物館の資料収集に際して、ブヌンの居住地域であるコロナ社に赴いた際に記録されたものと思われる内容となっている。資料の簡単なスケッチとともに、資料の現地名や由来にまつわる故事などが調べられていることに加え、それらの道具や衣服が儀礼的な交換に用いられる際の基準

が、ブヌン語で「蕃刀」を意味する *xinghali* という単位を用いて示されている。後に、ブヌンの親族関係と交換体系に関する一連の論考を発表していく馬淵にとって、資料収集は自らの関心をもった課題を実証的に論じるための材料を集めることにもつながっていたと考えられる。

また、馬淵の収集品の半数以上は、石器や土器、紡錘車といった考古学資料に近いものである点も興味深い。渋沢は AM 同人たちに、考古学に関連したものは民具ではないので収集する必要はないと指示していた。馬淵が収集にあたっていた時期はすでに、アチック・ミュージアムから民族学会附属民族学博物館となっており、渋沢による収集活動のしびりが必ずしもなかった。すなわち、民具収集という前提がない、自らの現地調査に並行させた収集活動を馬淵が行っていたと考えることもできるだろう。

#### 4.3 瀬川コレクション

瀬川コレクションは、戦前に農林技官として台湾に赴いた瀬川孝吉が収集した台湾原住民族の服飾、生活用具などのほかに、南米やアフリカ等のとんぼ玉、喫煙用具、服飾などで構成されている。瀬川自身は農学者であり、物質文化研究の専門家ではなかったため、収集した資料についてそれほど多くのことを論文で書き残してはいないが、瀬川コレクションの資料の中には、個別に調査や研究が行われたものも少なくない。それらは主として鹿野忠雄によって行われていたことも興味深い。このことは、当時の研究者たちの相互交流が緊密に行われていたことを物語っている。

瀬川自身の記述によれば、収集は 1929 年から 1939 年にかけて行われ、ほぼ台湾全土を網羅した原住民族の資料が収集されている。衣類、とんぼ玉を用いた装飾品は状態のよいものも多く、これらを中心とした展示会が民博も含めて複数回実施されてきた<sup>10)</sup>。また、各民族集団の喫煙用具のコレクションも豊富であり、煙管の雁首の多様性は視覚的にも楽しむことができる。

また、コレクションには台湾中部域の平埔族に関連した資料が含まれていることにも注目しておきたい。先にも述べたように、今後、平埔族の原住民族認定が本格的に議論されたときに、こうした平埔族の資料は民族認定の一つの材料となる可能性があるからである。こうした場合、資料にどのような情報が付帯しているかが重要な鍵となる。瀬川の平埔族に関連した資料には収集時の様子がわかる次のような記述が残されている。

「ある時埔里周辺に居住する平埔族のパゼツヘ族は織物が大変上手で未だ自分で作った古い着物を持っている人がいるという話を聞いたので早速埔里から枇杷城に行き探したところ譲ってもよいという人があり買い求めましたが今まで求めた他の種族のものとは大変ちがった美しいものでした。その時パゼツヘ族の人が近くに住む私共とちがう言葉を話す人が古い衣類を籠に入れ、天井に吊るし、祖先の遺品として尊敬していることを教えてくれたので、引きつづいて行って見ましたところ話通りの状態で保存している家が10軒余りありました。(中略)上衣、腰巻、肩掛け袋の三通りでいずれもひどく破損したものはかりでした。しかし麻地に半月上のパターンを色糸で綴織風に織り込んだ紋様はこの部落以外の地では未だ見たことのない独特のものでした。」(瀬川 1983: 6)

この述懐は、なかば瀬川の思い出のように書かれているが、収集資料の背景を知るうえではかなり貴重なものであろう。瀬川が収集した資料が枇杷城のパゼツヘとされてきた人たちが自分たちで製作していたものであるということは標本資料自体には付記されておらず、瀬川の記述を手がかりに資料の情報を確認することができるのである。またこの、近くに住む人たちが慣行していた衣類を籠に入れて吊るすという行為は、第2章で紹介した、サオの人たちが有してきた公媽籃仔信仰に相当するものであることが理解できる。瀬川の収集した資料そのものがサオの原住民族認定に用いられたのではないが、瀬川の資料の収集時期や資料の状態に鑑みた場合、この信仰が受け継がれてきた当時の様子を知ることができる。瀬川が収集した当時、平埔族であるパゼツヘの人々はサオの人々を異なる民族集団であると認識していたということが少なくとも明らかになるのである。収集者は収集した資料について、資料そのものへの記録以外にも書き記していることは少なくない。そうしたものを丁寧に見ていくことで博物館に収蔵されている資料の情報には深みが増すことになる。それが、収集された側にとって非常に重要な意味をもつ内容をはらんでいることも少なくない<sup>11)</sup>。

## 5 展示資料の情報をめぐる課題

これまでに述べてきたように、順益特別展示は、現在の台湾原住民族をとりまく社会的な状況をふまえたうえで、ある歴史的な脈絡、具体的には日本統治時代に台湾で人類学や考古学の調査を行っていた研究者によって収集された学術資料が、台湾社会においてどのような社会的意義をもちうるのかを意識しながら企画された。資料保存の状態、順益博物館の展示場の規模、保険や輸送に要する費用上の問題のために、実際に台湾に輸送し展示できる資料数や大きさには制限があるという実務上の課題はあったものの、従前の目的に照らしあわせながら資料の選定と展示会や図録で提供する解説のための情報を整えていった。

本章では、展示会開催にむけた一連の準備の過程において生じたいくつかの問題をとりあげながら、学術資料が公開される際に必要とされる条件について考えていく材料を提示することにする。

## 5.1 資料と民族との関係

展示会では出展した資料を観覧者に対して説明することが不可欠となる。説明の様式は資料の種類、対象となる観覧者の類別、解説を行う媒体によって多様であり、それらに対応した説明を整備していく必要がある。順益博物館は学校団体や子どもを連れた家族連れ、原住民族の来館者も多く、分量が多く、内容的にも専門用語がならぶ学術論文のような解説が展示パネルにならぶことは必ずしも適切ではなく、展示の内容や資料の情報が簡潔な解説文で示されることが望まれていた。同時に、これは、開館記念展示会の影響も多少はあると考えられるのだが、写真等を用いて、視覚的な効果をねらったデザインへの指向があった。現地におけるこうした博物館展示が受容されている状況を考慮しながら、資料の情報については、

- (1) 資料の収集地をできるかぎり明らかにし、民族別の記載は行わない。
- (2) 映像の使用は撮影された時期が明らかであると同時に、資料に関連した写真を使用する。

という2つの条件を原則にしながら、台湾原住民族の調査、研究を行ってきた日本側の研究者が実際に資料を閲覧したうえで、資料解説の作成を行った。

- (1) の条件を課した最大の理由は、原住民族の民族分類が非常に複雑に動いているという社会的な状況があったからである。

台湾の博物館で原住民族の展示を行う際によくとられるのが、文化的な項目を民族ごとに区分しながら展示する方法である。典型的な例が、衣服を民族集団ごとにマネキンに着衣させて展示するという方法である。この方法については、収集時期の異なる資料を展示するという点において慎重に考える必要があった。それは、台湾における民族集団の分類が時代ごとに変化しており、資料が収集された時期と現在とは異なる民族名称をもつ場合が生じていたからである。

例えば、順益特別展示のために選定された、檳榔の実を挿りつぶすための小さな臼と杵が組になった資料は、収集地が「中華民国 台湾省 花蓮県 秀林郷 新白楊村」、使用した民族がアタル族とされていた。この資料は旧文部省資料であり、収集された当時は少なくとも中華民国ではなかったことはともかく、収集地を含む地域の原住民族は収集された時期にはタイヤル（アタル）族と分類されていた。しかしながら、

現在、秀林郷の原住民族の人々はタロコという新たな民族集団として政府から認定されており、これをタイヤル（アタヤル）の資料として展示することは、現在の状況と齟齬を生み出すことになる。逆に、タロコと表記しても、それは当時の民族分類にしたがって行われた収集活動とは一致しない。

また、収集者が研究者であったことは、収集資料にある種のばらつきを与えることともなっていた。それは、収集者自身が関心をもって調査、研究を行っていた地域や民族集団の資料は数も比較的多く、収集者自身の記録した情報が利用できるが、逆に、収集者が調査を行っていなかった地域や民族集団の資料は数も少なく、種類にも乏しいという状況が生じる可能性があった。鳥居の収集した資料にはヤミヤツォウの資料が、鹿野はパイワン、ルカイ、馬淵はブヌンといった具合に、彼らに関心をもって調査した地域の原住民族の資料の割合が多く、展示資料の数に不均衡が生じてしまう可能性が考えられたのである。

(2) の条件をいれた理由は、映像資料を多用することが必ずしも出展した資料と観覧者との距離を近づけるとは限らない、すなわち、観覧者が展示資料を理解するうえで、写真や動画に代表される映像が必ずしも有効であるとは限らないと判断されたからである。

鳥居撮影の古写真が復元されて以来、台湾では古写真ブームと呼べる状況が生まれ、日本統治時代に撮影された写真をまとめた出版物が相当数刊行されてきた。また、当時の出版物の復刻版も台湾では少なからず刊行されており、日本統治時代に限定した映像記録をパネル等に利用することは可能であった。一方で、当時の状況や民族の様子を示す映像を解説パネルに利用する場合には、資料と映像との脈絡を明らかにしておく必要がある。例えば、順益特別展示において選定したツォウの人たちが、動物の皮から獣毛を削り取るために用いる利器(標本番号 H0176650)を展示する際に、

- ①資料そのものが使用されているもしくは収集時に撮影されているということが明らかである写真
  - ②その資料そのものは写されていないが、同種の利器が使用されている写真
  - ③利器は写しこまれてはいないが、資料が収集された地点を含んだ地域のツォウの人々の狩猟活動や何らかの作業の様子が写された写真
  - ④ツォウに限らず、狩猟活動にたずさわる原住民族が写しこまれた写真
  - ⑤狩猟活動とは関係のないツォウの人々が写し込まれた写真
- のうちのいずれを資料の背景の説明のために使用するかは、展示会の全体の目的や、

展示全体の脈絡における当該資料の位置づけによって異なることになる。順益特別展示の場合、個々の資料が研究者によって収集されているという資料収集の脈絡が重視されていることから、①の資料そのものに関する映像が最も好ましいと言えるだろう。一方で、こうした映像記録は必ずしも残されているとは限らない。そうした場合に、④や⑤の類いの写真を使用すると、資料の脈絡とは乖離した映像が観覧者の記憶に残されてしまうおそれがある。

仮に資料に関連した映像記録が残されていた場合、それらの記録が誰の手によって残されたものであるかも明確にしておく必要がある。すなわち、学術資料はその収集活動も調査や研究の一貫として行われたものであり、記録の正確性が保証される必要があるからである。

例えば、従前の資料は瀬川コレクションに含まれていたものであるが、実際に現地において、この利器が使用されていた状況について詳細な調査を行ったのは鹿野忠雄であった。鹿野は、調査で観察した利器や石器の写真を「著者原図」として論文中に掲載すると同時に、それらが使用されている状況の写真も「筆者撮影」として掲載している（鹿野 1946: 344-354）。一方で、この作業と類似した様子を写した写真が、瀬川孝吉撮影として近年刊行された書籍のなかに掲載されていた（湯浅 2000: 184）。鹿野と瀬川がともに同じ場所で、同じ時期に、同じ対象についての調査を行い、同じような写真を撮影したのかについては、様々な資料をもとに今後、検証していく必要があるだろう。博物館資料を個別に精査すると同時に、研究者の調査や研究の履歴についても研究を進めていく必要があることが理解できる。

## 5.2 資料解説の視点

先述したように、資料に与えられる解説文の量や内容は、その媒体や対象となる観覧者に応じて、より適切なものを選択していく必要がある。展示場の解説については台湾側で適切な長さのものを作成し、そのもととなる解説は日本側の研究者が資料ごとに作成し、それを図録に使用するという方法をとっていた。原住民族の調査を行ってきた研究者が、実際に資料を閲覧し、冒頭にもあげた展示会の目的が説明されたうえで、それぞれが執筆可能な資料についての解説文を作成した。

このようにして得られた解説文は結果的に大別すると3つのタイプに分かれる傾向があった。それは、①資料をその製作者や使用者の社会の脈絡で解説するもの、②資料そのものの属性について解説するもの、③資料について行われてきた調査や先行研究について解説するもの、の3種類である。具体的には次の通りである。

①の事例 (K3886)

「男性の皮製帽子。阿里山ツォウ語でツェオプグ (*ceopngu*)。材料は主にキョンの皮が用いられる。男子は17-8才になるとマヤスヴィ (*mayasvi*) 祭祀の時に男子集会所で成人儀礼を経験した。首長の訓示を聞き、長老から尻を鞭で打たれると、この皮製帽子を被ることを許され、以後日常的に身につけた。女子の場合は同じ時に首長家で成人儀礼があり、黒い頭巾を被ることを許された。」(宮岡 2009b: 134)

②の事例 (K4078)

「銅銭9枚と加工した貝板2枚及び土玉を紐で通したものである。銅銭の内訳は、寛永通宝3枚・乾隆通宝2枚・道光通宝1枚・咸豊通宝1枚・安法元宝1枚・不明銭1枚である。つまり、日本、中国、ベトナムの銭が用いられている。」(角南 2009: 140)

③の事例 (H0175992 ~ H0175995)

「アミの腰帯に用いられていた青銅製の飾り。鹿野忠雄は台湾において青銅の主成分である錫と銅が産出されないことから、台湾と外部との交易を想定した。一方で、クラッパーベルと称されたこの資料は、フィリピンのイフガオが使用している犬歯をつなぎあわせた耳飾りとのモチーフの類似性が指摘されている。」(野林 2009b: 137)

こうした相違が生じた理由は、その資料が現在でも、当該社会で使用されているかどうか、それらの資料に関する先行研究が行われてきたかどうかによるところが大きいと考えられる。①の例となった皮革製の帽子は、現在もツォウ社会で使用されているものである。解説文の作成者も当該社会における調査から、資料そのものの脈絡を十分に把握できる状況にあったと考えてよい。一方で、③の資料は、先行研究が十分に行われているものであると同時に、それは日本統治時代に日本語で書かれた論文であることから、資料に関連したこれまで日本で行われていた研究の学術情報を台湾側に公開するという意義を有していた。

②の資料については、①や③の資料とは異なり、収集地における使用状況や先行研究に関する情報に乏しく、解説者は資料そのものの属性を中心に解説を作成せざるをえなかった。しかしながら、資料を詳細に観察することによって、使用されていた銅銭が中国、ヴェトナム、日本の3ヶ所からの由来のものであることを明らかにし、それについて言及するにいたっている。この資料は台湾本島から離れた太平洋上の島嶼部に居住する原住民族集団が使用していた装身具であり、資料を通して交易関係が浮かび上がってくることを示唆した解説文となっている。

実際に、台湾の東部海岸部から緑島(火烧島)や蘭嶼をへて、フィリピン側のバタ

ン諸島，そしてヴェトナムの位置する東南アジア大陸部東部地域を結ぶ物質文化の流れは鹿野がその存在を想定しており（鹿野 1946: 233），近年の考古学的調査においても，有角球状耳飾りの製作址がバタン諸島のイトバヤット島において確認されたり（Bellwood and Dizon 2005），紀元前3世紀から1世紀ごろまでのヴェトナムのサーフィン文化に属する遺跡から出土された有角球状耳飾りのネフライトの産地が台湾であった（山形 2006: 101）ことが明らかとされており，台湾の東海岸部や東部の島嶼地域が古くから東南アジアとの交易を行っていたことと合致したものとなっている。

従前に示した3つの事例は民族資料が，社会的な脈絡，物質の属性，資料に関連した先行する学術研究という異なる性格をもった情報を有するというを具体的に示している。換言すれば，民族資料には，文化人類学，物質文化論，学術史の3つの観点から引き出すことのできる情報が潜在的に備わっているということになる。学術研究という点からはこの3つの情報はともに重要である一方で，展示会の観覧者にとっては，それぞれの情報をもつ意義が異なることも考えられる。例えば，文化人類学に関わる情報は，原住民族の文化についてあまり詳しくない者を対象とする場合，原住民族の人々の社会や文化を理解するうえで非常に重要なものとなる。一方で，当事者の原住民族にとってはこれらのことは自明のことであったり，時には彼ら自身の社会的，文化的脈絡とは矛盾が生じる場合もありうる。物質文化や物質の属性に即した情報は，それまで知り得なかった事実を伝えるという点，また，原住民族文化とは異なる枠組での資料の理解を可能にするという点において有効である。しかしながら，文化や社会とは乖離した情報にとどまる可能性は否定できない。学術史に関わる情報は，資料の歴史性をうかびあがらせることにその強みをもっている。一方で，一般の来館者がこうした内容に関心をもつとは限らない。

博物館の資料の有する情報は多様である一方で，それぞれの情報はそれを受け取る側の属性や状況によって，その意義を変えることに十分注意を払っておく必要があるだろう。とりわけ，外部者や市場から付与された経済的価値がその存在意義を決定しがちな芸術作品とは異なり，民族資料はそれを生みだしてきた当事者にとってどのような意味をもつかが重要になる。情報が量的に豊富であり，それらが質的にも多様であり，かつ精査されている状態を作りだしていくことは民族資料がもつ潜在的な価値を引き出すことにつながると言えるであろう。

## 6 展示会の準備の過程における台湾側の反応

展示会の準備を進める過程ならびに開幕以降、台湾側からも様々な反応が生じていった。本章ではその中から、博物館資料に関する共通の問題点としてしばしばとりあげられる、①資料返還に関する課題、②資料に与えられる制度的価値についての問題、③資料の解釈をめぐる矛盾、について述べることにする。

資料返還の課題は、とりわけ、植民地や占領地という経験を有した国家が、当時の宗主国がもちさった資料の返還を求める動きが強まっており、博物館資料をめぐる世界的に共通した課題となっている。資料の制度的価値は、資料が本来有している価値とは異なる基準を資料にあてはめることによって、国家や権威主体がそれらの基準に応じた資料の選別を行う状況を生みだしている。資料の解釈については、従前の制度的価値とも関連しており、もともとの所有者が資料に対して持っていた理解の体系とは異なる属性を外部者が付加することによって、資料のもつ意味をめぐる矛盾を生じさせる場合がある。これらの状況が、順益特別展示に際しても生じていたのである。

### 6.1 資料返還に関する課題

予想はされていたことではあるが、資料の返還に関わる問題は準備段階から生じていた。順益特別展示に関する資料の返還について言及される契機となったのは、日本の博物館に収蔵されている日本統治時代の資料が台湾で展示されるということを伝えたテレビ報道であった。

展示会が開催されるちょうど1年前の2008年6月に順益博物館側から館長と館員が民博を訪問し展示会開催についての企画会議を行った。この際に、順益博物館側は事前の広報活動を行うことをねらい、台湾の新聞やテレビを中心とした報道関係者を随行させた。報道関係者は、その段階で出展を予定していた資料に関する取材を行った。これらの取材で得られた情報が台湾において報道された後に、返還を求める声が、次のような経緯で原住民族側から出された。

現在、台湾では原住民族委員会が所掌する原住民族チャンネル（原住民族電視台）がケーブル配信され、一部の地域を除き台湾の全域で視聴できるようになっている。また、同じ内容の番組がインターネットを通じて配信されており、台湾の原住民族に関する情報が世界規模で発信されている状況となっている。順益博物館員の民博訪問には、原住民族チャンネルの報道クルーも随行しており、日本での取材の様子を報道し、展示を予定していたツォウの頭飾りを紹介した。新聞社もこの資料の写真いり

で、展示会の開催を伝える記事を一齐に掲載した。

この頭飾りは「頭目」もしくはそれに相当する立場の人々がかぶることのできるものであり、代々、ツォウの社会の中で継承されてきた貴重なものである。そして、この頭飾り一つが紛失してしまっており、それが日本のどこかの博物館にあるという言説がツォウの人々の間で広がっていた。紛失の時期は諸説あって定かでないが、終戦前後もしくは1970年代終わり頃とされていた。こうした状況にあつて、同じ種類の頭飾りがしかも日本の博物館にあり、それが台湾で展示されるという報道があつたために、もし民博の資料がそれに該当するものであるならば、ツォウ側にそれを返還してほしいという内容のインタビューが、その後には原住民チャンネルで放映されたということであつた。

この頭飾りは東大資料に含まれていたものである。東大資料における台湾原住民族関連の資料はかなりの数が鳥居龍蔵によって収集されたものである。鳥居はこの頭飾りを使用しているツォウの居住地域で調査を行っており、相当数の資料収集ならびに写真撮影を行っている。そして、この資料と同種の頭飾りをかぶつた人物の写真を鳥居は撮影している。写真中の頭飾りの細部の特徴は当該資料のそれと酷似しており、同一のものである可能性は否めない。鳥居は当時の調査報告を東京帝国大学の紀要によって刊行している（鳥居1976）。それによれば、該当する写真の解説は次のように記述されていた。

「そのかぶりものの上部は赤色に染めた羽毛製の一種の王冠である。中央部は詰めものを入れたトクサ製の布、また下部はドイツ輸入の赤色キャラコである。彼は左手に羽をつけた矢をもっている。新高族だけがこの羽つきの矢をもち、それがよく飛ぶことを知悉している、他の蕃族も矢をもつてはいるが、羽つきのものはなく、かつ、弓矢の使用がまことにつたない点で、新高族の進歩がみられる。」（鳥居1976: 27）

鳥居はツォウのことを新高族と称すると同時に、「スンガウ」という現在の民族名や小集団名の中には存在しない集団が使用するものとして、この資料を説明している。どのような経緯で鳥居が「スンガウ」という集団名を用いたかについてはさらに検証する必要がある。しかしながら、鳥居の記述や写真の記録からは、この資料が収集されたのは、第二次世界大戦以前と考えることが適切であつた。したがって、ツォウの人たちの間で紛失したとされている「頭目」の頭飾りとは異なるものである可能性が強かつたのである。関係者を通じて資料に関する説明を行った結果、正式な資料返還の要請にはいたらなかつた<sup>12)</sup>。

次に、資料返還の要求が出されたのは、展示会を開催する数週間前であつた。原住

民族出身のある国会議員が、博物館や美術館を所掌する文化建設委員会（日本の文化庁に相当）に対して、展示会の終了後に日本への返却を禁止し、原住民族側の資料を返還するべきであるという要望を出したものであった。これについては文化建設委員会が、正式な手続きを経た借用が行われていることを順益博物館に確認し、台湾内の法律にしたがった取り扱いを行うということを文書で回答したことによって、一般の原住民族の人々を巻き込むような返還運動に発展することはなかった。

資料の返還をめぐるこの2つの事例を考えた場合、民族資料を扱う際には、土地の人々と資料との関係ならびに、国家もしくは政治体と資料との関係という異なる位相のなかに資料の所有の問題が位置しているということに留意しておく必要がある。ツォウの人々にとっての返還は、その資料が彼らの社会にとって重要な意味をもつものであることが理由であったのに対し、国会議員の主張はそれが原住民族のものであり、日本統治時代に植民地主義的状況のなかで日本側の手にわたったということが返還要求の理由になっていたのである。別の見方をすれば、ツォウの人々が示した返還の要望は、過去のツォウの人々から収集した資料は現在のツォウのものであるということではなく、頭飾りは現在の彼らにとって民族のアイデンティティを示す役割の一端を担う貴重なものであるということから生じていたと言える。

## 6.2 資料の制度的価値

準備の段階から会期中にいたるまで、台湾側からしばしば出されていた疑問が、日本の重要有形民俗文化財に原住民族の背負い籠が指定されていた理由であった。

民博には日本の重要有形民俗文化財の指定をうけている資料が何点か存在する。これらは、個別の資料がその指定をうけているのではなく、ある主題に関連した複数の資料がまとまった形で重要有形民俗文化財の指定を受けている。すなわち、個々の資料そのものの価値もさることながら、それらの資料から引き出される文化的営為が文化財として扱われていると解釈できる。

重要有形民俗文化財は、1954年に制定された「重要有形民俗文化財指定基準」によって指定されるものであり、「(一)衣食住に用いられるもの 例えば、衣服、装身具、飲食用具、光熱用具、家具調度、住居等」といった具合に、人間の生活に関わる10項目に関連した資料が指定の対象となっている。さらに、これらの中から、歴史的変遷、時代的特色、地域的特色、生活階層の特色、職能の様相を示すものという条件が加わったものが指定される。背負い籠は、最初に述べた対象のうち、「(三)交通、運輸、通信に用いられるもの 例えば、運搬具、舟車、飛脚用具、関所等」に含まれ

ている。さらに重要なのは、この基準の第三項に「他民族に係る前二項に規定する有形の民俗文化財又はその収集で我が国民の生活文化との関連上特に重要なもの」という規定が設けられていることである。本来であれば比較する位相にないはずの国民と民族との比較を肯定することによって、日本国民の単一民族性の表明がなされているとも言えなくはなく、文化を規定する基準としては批判的な検討が必要と考えられる。一方で、日本の民俗文化を他の民族の道具や文化的な営為によって相対化して考え、相対化の対象となる他の民族の道具も含めて文化財としていく態度は、日本の民俗文化を閉じた系としてはとらえておらず、相応の評価が与えられてもよいであろう。

しかしながら、こうした日本の民俗文化財制度は台湾の人々にとっては必ずしも馴染みのあるものではない。とりわけ、歴史的には化外之地の住民と見なされていた原住民族の日常生活品に対して「文化財」という言葉が与えられることに対する違和感を漢族系住人が覚える可能性は否めない。さらに、原住民族の人々にとっても、自分たちの過去の日常生活用品が文化財として扱われていることは意外だったようである。それは、次のような言説が原住民族の側から出されたことから理解できる。

「そんな昔のものがずっと日本の博物館に保管されていたのはすごいことだ。こんなものは自分の若いころはどこにでもあったが、そんなものにとっておく人はいない。(日本人の考えることは)よくわからない。日本の国の大事なものに指定されていることはありがたい。」(2009年6月9日 100歳以上の女性)

これは、展示会の開会式に招待された百余歳の原住民族女性が、重要有形民俗文化財に指定されている背負い籠を見たときにつぶやいた言葉であった。原住民族の日常品で、しかも製作者もわからないようなものが、台湾ではなく日本の国指定の文化財になるということに違和感を覚えたのであろう。

台湾では日本の文化財にあたる言葉として文化資産という用語が用いられている。文化資産は文化資産保存法によって、指定や指定後の保存、管理が制度的に定められている。文化資産保存法の目的の一つは多元文化を発揚させることにあり、その意味では、原住民族を含めた複数の民族集団が共存している台湾には適切な法律の体裁をとっていると言える。

また文化資産保存法で定義される文化資産の範囲は広く、「古跡、歴史建築および聚落」「遺址」「文化景観」「伝統芸術」「民俗および関連文物」「古物」「自然地景」に分類されている。このうち、原住民族が製作してきたものは「民俗および関連文物」もしくは「古物」という範疇に入るのが比較的、適しているように考えられる。しかしながら、「古物」に関する条項は、考古学資料や歴史資料にあわせた記述になって

おり、博物館に収蔵されている原住民族の関連資料は「古物」としての指定を受けるには必ずしも馴染まない位置づけにある。一方で、「民俗および関連文物」は現在も行われている工芸や宗教行事といったものも指定の対象となるように定められている。

筆者の調査不足は否めないが、原住民族の人々に関わる博物館の資料が文化資産に指定されている例を筆者は把握していない。しかしながら、原住民族の文化が文化資産という制度的な枠組の中で扱われることは一般的ではないことは、民博に収蔵されている背負い籠が重要文化財に指定されていることに対する台湾側の反応から読み取ることができる。文化資産に関わる行政措置のもとで、原住民族に関連した事物や行為が今後どのように位置づけられていくかは、興味深い課題と言える。

### 6.3 資料の解釈をめぐる矛盾

順益特別展示ではアンケート票は設置せずに、観覧者が展示会を見た感想をノートに書き入れる方法をとっていた。本稿を執筆している時点では観覧者が記述した感想をすべては入手していない。したがって、来館者がどのような反応をとったかについて、筆者は部分的にしか把握できていない。また、筆者自身は順益特別展示の会期中、順益博物館に滞在し続けていたのではなかったため、観覧者の反応を直接知る機会はそれほど多くはなかった。こうした制約のもとであることをふまえたうえで、資料に関わる台湾側の反応について留意しておくべき指摘が観覧者より寄せられていたことについて述べておく。それは、タイヤルの人々がイレズミをいれるときに使用する針と針をうちこむための小槌、針をいれた際に皮膚表面に滲み出る墨や体液をふきとるためのへらが一組になった道具（標本番号：H0176571）に付された展示場の解説パネルに対する疑義であった。

この資料について図録の解説は以下のように記述されていた。

「[針],[小槌],[血ぬぐい具],[補助の針]である。タイヤル(セディック, タロコ)のものだろう。施術師は額か頬にあてた針の柄を小槌で加減しながら叩き、松などを燃して採った煤を傷にすりこんだ。竹製の血ぬぐい具を用いて施術部がよく見えるようにし、補助針はうまくできなかった箇所を刺しなおすか、血を傷に詰まらせないために用いた。地域差はあるが、施術者は小槌は *totsin*、血ぬぐい具 *quwar* と称し、針は未婚者用 *atoc makarakis*、私通者用 *atoc manau*、既婚者用 *atoc banakesi* をそれぞれ使い分けていた。施術を受ける人に不義や罪を犯していないかを施術師が問う「貞操テスト」がおこなわれることが通例であったため、針を使い分けたと考えられる。針を小槌で叩く施術法は、オーストロネシアに共通する。」(山本 2009: 142)

順益博物館がこの解説から作成した解説パネルでは、従前の図録解説の「地域差はあるが」以下の部分で使用されていた。これに対して、観覧者が意見ノートに書いていた指摘には、イレズミをほどこすことはタイヤルの人々にとっては誉れ高いことであり、私通者がイレズミを施すことそのものが不可能ではないかという疑問が呈されていた。また、観覧者自身がタイヤルであるということも記されていた。この資料の解説パネルの内容については、他の観覧者も何らかの反応をしていた可能性がある。先述したタイヤル出身の機織工芸作家の尤瑪が展示を見学した際にも、この解説パネルの内容をそれまでに耳にしたことがないと述べており、タイヤルの人々の歴史や文化、もしくはタイヤルのイレズミ慣行についての文化的な背景について何らかの知識を有している人にとっては、少なからず疑問を抱かせる内容であったことは十分考えられる。これには、特定の民族誌の記述や、特定の地域や集落の事例が、どこまで一般化できるのかという問題が含まれている。

この解説文は、台湾大学に収蔵されている同類の道具について書かれた論文の内容を参照しながら書かれたものである。図録に記述された解説の前半部分は、イレズミをほどこす上での技術的な側面である。これに対し、後半部分は資料の社会的脈絡にふれている。この解説文は、当初は参照とした論文の記述にしたがって、特定の集落における慣行であることが集落名とともに具体的に書かれていた。しかしながら、出展した資料がその集落で収集されたものであることが確認できなかったため、より一般的な説明としての解説文の修正を執筆者に依頼したという経緯があった。

図録や解説パネルで表現された資料に関わる説明は誤ったものではなかったが、その脈絡が明確でなかったことが観覧者を混乱させた原因となったことが考えられる。すなわち、書かれた解説の内容がどの地域のいつの時点で、どのように観察された、もしくは聞き取りが行われたことなのか明確ではなかったことが観覧者の疑問につながっていったのであろう。さらに、扱った資料が、近年、民族認定について様々な議論が交わされているタイヤルならびにその隣接する諸集団のアイデンティティに関わるイレズミの道具であったということが問題を複雑にさせていた。

イレズミの慣行は台湾の原住民族のいくつかの集団が有している。北部地域のタイヤルやサイシャットは主として顔面にイレズミを、南部のバイワン、ルカイは体幹部や手の甲、下腿部などにイレズミを施していたことが知られている。一方で、漢族系住人の社会の中では、イレズミは必ずしも肯定的には認識されていない。罪人やアウトロー、そして未開人による慣習というのがイレズミへの一般的な評価であろう。これに対して、ニュージーランドのマオリの人々が伝統文化と民族アイデンティティの

象徴として、近年、イレズミを積極的に復興させている状況なども手伝い、台湾の原住民族のなかでもイレズミを再評価しようとする動きも見られる（山本 2002: 314–317）。とりわけ、民族分類の歴史的過程を再検討してきた北部のタイヤルの人々にとって、イレズミをめぐる慣行、例えば、施術する身体の部位であるとか、その紋様といった属性は、個々の集団を特徴づける条件ともなっており、敏感に反応する文化的要素となっていたのである。

## 7 考察

順益特別展示は、日本が台湾を統治していた時代に研究者によって収集された学術資料を台湾で公開することを通して、博物館資料がどのような社会的意義を有するのかを考える機会となった。冒頭でも述べたように、社会的意義のとらえかたは、対象をどのように設定するかによって多義的である。順益特別展示の場合は、収蔵している博物館が存在する日本やその学術研究に関連したコミュニティも含めた日本社会という切り口も可能であるし、収集された当事者である原住民族社会や、原住民族社会も含めた台湾社会というとらえかたも可能となる。

原住民族がおかれてきた社会的状況は必ずしもその存在を尊重されたものではなかった。こうした状況から生じたのは、為政者やマジョリティ集団と原住民族との間の対立の構図である。1947年に生じた二二八事件とそれがきっかけで生じた国民党政権による台湾住民への弾圧は、外省人と本省人との間の対立だけでなく、原住民族と外省人との間にも深い溝を作った。一方で、実社会のさまざまな場面において本省人と原住民族との対立も強まっていった。圧倒的な人口差に加えて、日本統治時代には基本的に特別行政区の中で、経済的にも政治的にも外部との交渉を断たれた、言わば閉じた社会の中にあった原住民族の人々が、中華民国時代になって、同じ国民として、本省人と経済的にも政治的にもわたりあわなければいけない状況が生じたのである。本省人も含めた漢族系住人のことを原住民族の人々は *pairan* と呼ぶ。これは、本省人の言葉で「悪人」の発音と同音である。急速な社会成長をとげた台湾社会において、社会進出の遅れた原住民族は、他の民族集団によって台湾社会において劣位に配されつづけてきたと言っても過言ではない。

こうした動きに歯止めをかけ、原住民族を社会の表舞台に立たせたのが、原住民族自らが実践してきた原住民運動であった。その結果、原住民族の権利や独自の文化の存在が制度的に保証され、原住民族が台湾社会の中で尊重される存在として認めら

れ、他の民族集団と対等になったかのように見える。確かに、原住民族電視台といった原住民族文化を社会に発信するためのマスコミが生まれ、原住民族出身の人気歌手や俳優が活躍するようになり、原住民族文化は台湾社会の中でにわかに市民権を得た。しかしながら、筆者には、これは原住民族側の一方的な要求に対する台湾社会の部分的な対応にすぎないようにも受け取れる。現在の台湾社会の成員が原住民族文化をどのように理解しているかと問いかけたとき、原住民族と漢族系住人との間で共有されている知識や社会観は必ずしも十分とは言えない状態にあるだろう。もちろん、筆者は台湾の状況を批判的に述べてはいるが、翻れば、日本国内におけるアイヌ文化に対する認識についても同様な課題を我々が抱えているということは言うまでもない。こうした表面的な異文化理解の状況を前進させるために必要とされているのは、価値観を共有するという状況を作り出すことにほかならない。今後求められていくのは、原住民族と漢族系住人が原住民族の文化や社会を理解するための共通の枠組を作っていくことなのである。そして、価値観の共有そのものは様々な手段によって可能となる。博物館資料をめぐる営みもそれに貢献しうるものであると筆者は理解している。それは、博物館資料が基本的には、文化や社会を理解するための学術研究によって支えられてきたからである。

原住民族の物質文化という切り口でこの問題をとらえた場合、彼らの物質文化が彼らと外部者との間でそれぞれの時代ごとに異なる関係性をもって存在してきたことが、資料に関わる歴史研究や物質文化の調査によって明らかとされてきたことは重要であろう。資料にそうした学術情報が付加されることによって、原住民族が製作し使用してきた道具や衣服が、原住民族社会の中に閉じていたものではなく、社会的な広がりをもっていたことが理解できるからである。一方で、資料にどんなに豊富な学術情報が付加されていたとしても、当該社会に関する知識を有していなければ、学術情報そのものがどのような意義をもつかが理解できなくなり、結果的にはそれらの資料への関心も薄れてしまうことになってしまうかもしれない。資料の歴史性と現在性の両方が説明される必要がある。

一方で、それだけでは十分とは言えない。何故ならば、情報を受け取る側は必ずしも資料について十分な予備知識を備えていたり、原住民族に特別な関心を有していたりするとは限らないからである。したがって、情報を提供する側、すなわち、研究者や博物館は、観覧者側に情報の行間を読み取ってもらうことを最初から期待してはいけないのであろう。タイヤルのイレズミの施術具に関する解説に対して疑義が生じたのは、展示する側で資料が有する社会的脈絡や資料そのものに関して得られている情

報の評価を十分に行わないまま、一般化された説明で代替させてしまったことに起因している。展示場の解説文には地域的多様性についてふれてはいるが、それは免罪符にはならない。なぜならば、原住民族の文化に地域性が見られることそのものが十分に理解されていないからである。資料そのものに与えられている情報、資料に関わる一般化された知識さらに、資料に関する情報の由来についても明確にしておく必要があると同時に、それをどのような観覧者が見て、どのように資料を観覧者が解釈するのかということについても研究者や博物館は十分に意識しておかなければならない。

従前に述べたような、台湾社会における原住民族資料がもつ民族間の協同のための存在という意義を認めたいうで、民博に収蔵されているかつて台湾で収集された資料を現地社会で展示することにはどのような意味があるのかを考えた場合、まず、最初にあげられるのが、部分的ではあるにせよ、日本に台湾原住民族に関連したどのような資料が存在するのかを収集地の台湾において、実物をもって、それらがどのような背景で収集されたかを明らかにしておくことが必要だということであろう。この事は、先述したツォウの頭飾りの返還問題の事例にあるように、博物館が現地社会に対して資料を所蔵していることの釈明を行っているという批判もできるであろう。しかしながら、博物館が資料を社会に開いていくことにより、資料のもともとの持ち主であった原住民族の人々が、歴史的な経緯も含めて現在の状況を理解する環境を整えることに幾ばくかの貢献ができることは間違いない。これは、博物館側にとっても新たな調査や研究の過程に入っていくことにつながる。すなわち、学術資料を理解する枠組を研究者コミュニティから公共に広げていくことにより、新たな研究の視点を得るということである。

ここで、福岡が指摘する学術資料としての映像記録がそれぞれの土地でもつ意義は重要であろう。映像記録と博物館の標本資料とは属性が異なるが、資料が土地の人々と研究者や博物館とを結ぶという点においては共通する部分が少なくない。

「その場合、地元の役に立たない映像は、何も知らないよそ者の映像として切り捨てられるかもしれない。そのとき、研究者による映像は、「無色透明」なものとして地元社会からは無視され、ある種の「客観性」を獲得するのかもしれないが。そうした人畜無害な客観性を獲得したいと願うなら別だが、現代における人文社会科学研究は、自分たち自身が、研究対象とする社会的文化的事象のプロセスの一部として組み込まれていることを自覚し、そこでどのようなポジションをとるのかを考える必要に迫られている。」(福岡 2009: 9)

筆者なりに福岡の主張を理解するならば、学術研究と調査や研究の対象となってきた社会との間にあるずれやねじれを可能なかぎり小さくすることが、これからの人文

社会科学的研究に求められているということである。そして、それは現在進行形の調査や研究だけでなく、過去における人文社会科学的研究についても同じことが求められていると言わざるを得ない。すなわち、現在において研究を進めている我々は、やはり過去の研究の営みが、どのような意味を当時有していて、さらに現在においてもどのように定位できるのかを説明する必要があるということである。なぜならば、現在の研究は過去に行われた研究を礎として成り立っているからにほかならないからである。そして、博物館は学術資料を通してその説明を実現できる場所ということになるだろう。

博物館の存在意義を原点に立ちもどって考えた場合、それは、人と人とが交流し対話をする場所では必ずしもない。それは博物館に本来とは異なる営為を代替させているにすぎないと筆者自身は考えている。順益特別展示の図録の中で、宮岡が言明する「博物館という施設が資料の保存をその至上の使命の一つとしているがゆえに、わたしたちは、現在も博物館でそれらの資料に出会うことができるという点である。そしてだからこそ、博物館が、過去と現在、主流社会と周辺社会といった時空を超えた「接触」を構成する領域として意義を持ち続けるのである」（宮岡 2009a: 85）という主張に加えておきたいのは、収蔵している資料を保存されるべきものとして扱うだけでなく、学術資料として調査や研究の対象とし続けることこそが、博物館を「接触」領域として機能させるために不可欠な営みだということである。

日本の他の研究者たちが躊躇した台湾の原住民族の人類学的な調査に没頭した鳥居龍蔵、原住民族の集落をくまなく歩き、台湾における人類学研究の成熟をはたしていった鹿野忠雄と馬淵東一、農学という他の研究分野を歩みながらも学際的に原住民族の物質文化を見つめた瀬川孝吉をはじめ多くの研究者が、日本統治時代に台湾で学術研究を通して、原住民族の資料を収集していった。彼らが収集した資料には彼らの目にうつった原住民族の文化や社会が刻み込まれている。こうした資料の歴史的、学術的背景を明らかにすることは、先達の学術研究と原住民族文化への畏敬の念を生み出すことにほかならないのである。

## 8 結語

現在、台湾原住民族の物質文化というと、タイヤルの織物やパイワンの木彫といった、一見「原住民族的」な作品に代表される原住民族工芸や、民族固有のモチーフをいかした絵画やインスタレーションといった原住民族芸術を想像しがちである。ま

た、地域の工作室で行われている工芸品の製作がとりあげられ、そうした創作活動を通じた自己表現や民族のアイデンティティの表象が集落を中心とした原住民族のコミュニティの発展に関連づけられてとりあげられることも少なくない。一方で、博物館に収蔵されている「古い」器物には原住民族の伝統が投射されているといった解釈がなされ、民族文化の固有性が強調されていく傾向は否めない。確かに原住民族の人々の物質文化は、彼らが自らの伝統の中で育み継承させてきた貴重な財産であることは疑う余地はないであろう。しかしながら、彼らが製作してきたものを丁寧に見ていくことで、多様な民族間関係が交錯してきた状況が存在してきたことが浮かび上がってくる。それは、民族集団間で異なる物質文化の伝統があったが、現在では民族の境界をこえたモチーフの借用や技術の広がりがあるため、それぞれの民族の固有性が希薄になっているといった表面的な印象に留まるものではない。台湾社会のもっとも根幹に関わる、原住民族と漢族系住人、そして日本統治時代の日本人も含めた関係性の中に原住民族の物質文化が存在してきたという事実である。これは、民博に収蔵されてきた台湾原住民族に関連した資料を見つめなおすことによっても理解できた知見である。

一方で、原住民族と漢族系住人との間で、排他性をともなわない物質文化の共有のありかたが、徐々に台湾社会の中で進行していることは、原住民族の物質文化に新たな展開をもたらしていく可能性がある。漢族系デザイナーとの協同によって制作された原住民族の刺繍細工作品が台湾の工芸を代表するものとして、海外にも紹介されていく例はその典型であろう。これは、もちろん、特定の民族集団に見られる異文化に対する受容システムが機能している可能性もあるだろうが、彼らがもの作りの仕事を通して構築してきた民族間における相互理解の関係に負うところは少なくない。原住民族の物質文化はそうした新たな民族関係のなかに展開しているのである。

こうした状況の中で、博物館に収蔵されてきた資料は原住民族の物質文化の歴史性を理解するうえでの不可欠な存在として、今後、その重要度は増していくと考えられる。それは、原住民族の当事者が自らの物質文化をふりかえるためのものとしてだけでなく、また、原住民族の物質文化を原始芸術と認識していた態度とは異なる、台湾社会の成員がともに物質文化を通して原住民族を理解し、協同へと向かうための糸口となる社会的意義をもった存在なのである。原住民族の物質文化は原住民族という当事者以上に、彼らを取りまく台湾社会の大多数をしめる漢族系住人にとって、従来の価値観を変えうるきっかけを作りうるであろう。

こうした脈絡で考えた場合、博物館資料は民族間の関係性に新たな可能性を見いだ

すための文化資源として機能すると同時に、資料を収蔵している博物館そのものが、原住民族と他者とを、そして原住民族同士を結びつけていく結節空間として展望されるのである。

## 謝 辞

本論文の主題となった順益特別展示にたずさわる過程において、順益台湾原住民博物館の游浩乙館長、侯道慧氏をはじめとする順益博物館のスタッフの方々、展示会の企画委員の本館特別客員教授である笠原政治先生、福岡大学准教授の宮岡真央子先生、また順益台湾原住民研究会の会員諸氏には、展示会の構想から実施、図録の執筆にいたるまで様々な面においてご協力、ご助言いただけたことに大変感謝している。同時に、資料の返還をはじめとする様々な問題が生じる可能性があるにも関わらず、この計画を進めることを承認していただいた当時の部長会議のメンバーと松園万亀雄民博前館長にも記して感謝の意を表したい。

尚、本稿は、科学研究費補助金（基盤研究：B）「口誦から見た北部フィリピン・台湾の少数民族世界に関する言語学的・人類学的調査研究」（代表：森口恒一、静岡大学教授）ならびに、国立民族学博物館奨学寄付金「順益台湾原住民博物館研究賛助金」による研究成果の一部を含んでいる。

## 註

- 1) 順益特別展示では展示会の基本構想から実施設計にいたるまでの過程を筆者が主導しており、第3者による展示会の趣旨や内容に批判的検証が行われることが望ましい。本稿がそうしたことが得られる機会を作るきっかけになることも筆者は期待しているところである。
- 2) 西拉雅原住民事務委員会のホームページアドレス (<http://Siraya.tnc.gov.tw>)。2010年3月10日確認。
- 3) 台湾の著名な歴史学者の曹永和氏が2000年に民博を訪問し、収蔵庫を見学した折に、台湾原住民族の資料を閲覧しながら、収集されたのは古い時期でありながら、使用された形跡が見られない資料について、こうしたものは生蕃屋で売られていたものかもしれないとその印象を語ったことがある。生蕃屋は、こうした原住民族に関連した手工芸品や写真集などを販売していた台北にあった有名な専門店である。
- 4) 国立台湾史前文化博物館の設立の経緯や展示については拙稿を参照（野林2008）。
- 5) 2007年12月の民博での調査に際して、尤瑪らは標本資料を前にして祖先に調査の旨を伝える黙祷を行っていたのが印象的であった。
- 6) ヤミは第二次世界大戦後の中華民国施政下では雅美という字をあてられていた。原住民族という名称とともに、本来の名前をとりもどすという正名運動が台湾の原住民族の間で活発になると軌を一にして、ヤミの人たちから、彼らの言葉で人間を表すタオ（達悟）に名称の変更を求める声があがった。しかしながら、彼ら自身の間で賛否両論があり、結論はつかないままとなっている。
- 7) この映像は番組化されビジュアル・フォークロワが発行しているので、現在でも鑑賞することが可能となっている。アチック・ミュージアムのロゴが入った映像は、タイトルを「台湾高雄州潮州郡下パイワン族の採訪記録」としている。その内容は、(1) 隘寮溪、(2) パクヒョウ (3/26)、(3) パイルス (3/26)、(4) マカザヤザヤ (3/27)、(5) タラバコン附近 粟播きの準備 (3/28)、(6) 下パイワンへの途上 パイルス、マカザヤザヤ、タラバコンを観る、(7) 下パイワン (3/28) 昭和11年下パイワンの一部約50戸が山脚へ移住した、

- (8) 笠(リナイ)の製作, (9) ピューマ(3/29) 紡績作業, (10) 蓑の製作, (11) クワルス(3/30・3/31), (12) 頭目の家, (13) 甘藷畑, (14) 狩の支度, (15) 踊り, (16) カビヤン(4/1・4/2), (17) 竹籠の製作, (18) 里芋(バサ)の植付, (19) 泉(タタン), (20) 火干芋(アラジ)の製作, (21) 林辺溪, (22) ライ(4/5・4/6), (23) 食事, (24) 祈祷者 パラジャイ(男), プリガオ(女)となっている。
- 8) 推定のかたちをとっているのは、鹿野が撮影したとされるパイワンに関する写真のネガやプリントが残されていないということである。ちなみに、瀬川孝吉との共著になる *An Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines Vol. 1, The Yami* の草稿が、民博の泉靖一アーカイブに混在しており、同書の紙焼きプリントが大量に見つかっている。少なからぬ写真の裏面には *Photo taken by T. Kano* というスタンプが押されている。これらは、現在、鹿野忠雄アーカイブとして民博において整備中である。
- 9) 笠原の分析によれば、本書中の馬淵の分担度は全体の約70%であることがわかっている(笠原2009b)。
- 10) 瀬川コレクションの資料を出展した展示会は、渋谷区立松濤美術館における特別展「台湾高砂族の服飾—瀬川コレクション」(1983年)、民博における企画展「台湾先住民の文化伝統と再生」(1994年)が開催されている。
- 11) こうした資料に関する情報を研究者がいくら見つけ出しても、それが資料の情報として記録されていくシステムが整備されていなければ、その価値は著しく減退することになる。動物標本や植物標本には、その標本の調査者が新たに知り得たことを記録し、情報量を付加させるアノテーションのシステムが整備されている。民族資料にももちろんこうしたシステムは不可欠であると考えられる。
- 12) これについては、この展示会の実行委員の一人である福岡大学の宮岡真央子氏にいろいろな点においてご尽力いただいた。現地で長期間のフィールドワークを行い、現地社会についても非常に精通している同氏には数多くの助言をいただいた。こうした言説が長い間、植民地統治下もしくはマジョリティ社会の軋轢の中におかれていた原住民族の人々の間に生まれることは理解できよう。残念なのは植民地時代に行われていた研究活動や博物館の収集活動が支配、被支配という関係性の中で行われていたと解釈する傾向が一部のジャーナリズムや研究者に見られるということである。自らこうした言説の背景を丹念に調査し、その結果知り得た事実を論文や著作で発表するのではなく、こうした言説を「文字通りに」とらえて、批判的、懐疑的な発言を行う研究者が存在するとすればそれは残念であると言わざるをえない。

## 文 献

Bellwood, P. and E. Dizon

- 2005 The Batanes Archaeological Project and the “Out of Taiwan” Hypothesis for Austronesian Dispersal. *Journal of Austronesian Studies* (南島研究学報) 1(1): 1–33, 台東: 国立台湾史前文化博物館。

陳俊男

- 2006 「サキザヤ(奇菜族)の民族認定」及川茜訳・台湾原住民研究シンポジウム実行委員会編『台湾原住民研究—日本と台湾における回顧と展望』pp. 129–142, 東京: 風響社。

陳奇祿

- 1978 「序」陳正雄著『台湾原始芸術精選集』pp. 4–5, 台北: 台湾原始芸術館。

陳文玲

- 1997 『台湾原住民文物資料調査と研究—東京国立博物館の収蔵品を例として』(1995年度財団法人交流協会日台交流センター歴史研究者交流事業報告書) 東京: 財団法人交流協会。
- 1998 「「サイシャット」の民族名称に関する一考察」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究』3: 178–196, 東京: 風響社。
- 2000 「エスニック・バウンダリーから「民族集団」を考える—台湾先住民族サイシャットを事例として」『日本台湾学会報』2: 46–57。

- 陳元陽・堺正紘  
1996 「台湾の林野制度が及ぼした原住民族への影響」『九州大学農学部演習林報告』75: 57-68。
- 陳正雄  
1978 『台湾原始芸術精選集』台北：台湾原始芸術館。
- 方鈞璋  
2008 「重現祖先的盛装：記史前館泰雅族傳統服飾及相關器物重製蒐藏計畫」『重現泰雅』pp. 13-24, 台東：国立台湾史前文化博物館。
- 馮明珠（主編）  
2006 『黎民之發』台北：国立故宫博物院。
- 福岡正太  
2009 「映像による民族誌の課題——社会的プロセスとしての芸能の記録」『平成20年度人間文化研究機構総合推進事業「パブリック・ヒューマニティーズの方法論：学術標本資料ならびに文化資源のネットワーク型共同利用から創出される学際的専門知と公共社会との融和」研究活動報告書』pp. 9-10, 大阪：国立民族学博物館。
- 原英子  
2000 『台湾アミ族の宗教世界』（草場英子）福岡：九州大学出版会。  
2005 「アミ——拡張する市街地とアミ集落」末成道男・曾士才編『講座世界の先住民族——ファースト・ピープルの現在 01 東アジア』pp. 124-138, 東京：明石書店。
- 胡家瑜  
2001 「馬偕収蔵與台湾原住民印象」許功明主編『馬偕博士収蔵台湾原住民文物——沈寂百年的海外遺珍』pp. 66-74, 台北：順益台湾原住民博物館。
- 胡家瑜・崔伊蘭（主編）  
1998 『台大人類學系伊能藏品研究』台北：国立台湾大学出版中心。
- 金関丈夫  
1942 「民芸解説木匙」『民俗台湾』2下(11)。
- 鹿野忠雄  
1941 「最近偶感」『民俗台湾』1(4): 1。  
1946 『東南亜細亜民族学先史学研究第一卷』東京：矢島書房。
- 笠原政治  
1998 「台湾原住民——その過去と現在」日本台湾原住民研究会編『台湾原住民研究への招待』pp. 15-25, 東京：風響社。  
2009a 「日本統治時代における収集と物質文化研究の概説」野林厚志主編『百年來の凝視』pp. 33-43, 台北：順益台湾原住民博物館。  
2009b 「人類学者・馬淵東一を生んだ『台湾高砂族系統所属の研究』の調査」『馬淵東一の学問與台湾原住民族研究（第二回台日原住民族研究論壇予稿集）』pp. 28-34, 台北：国立政治大学。
- 川村湊  
1996 『「大東亜民俗学」の虚実』東京：講談社。
- 木下直之  
2003 「人が資源を口にする時」『文化資源学』1: 1-6, 文化資源学会。
- 小林保祥  
1944 『高砂族パイワヌの民芸』東京：三国書房。
- 国分直一  
1981 『台湾考古民族誌』東京：慶友社。  
1997 「『民俗台湾』の運動はなんであったか」『月刊しにか』8(2): 122-127。
- 窪田幸子  
2007 「アボリジニ美術の変貌——文化資源をめぐる相互構築」山下晋司編『資源人類学 02 資源化する文化』pp. 181-208, 東京：弘文堂。
- 林昌華  
2001 「馬偕与台湾山地原住民の第一次接触」許功明主編『馬偕博士収蔵台湾原住民文物——沈寂百年的海外遺珍』pp. 54-65, 台北：順益台湾原住民博物館。
- 林志興  
2008 「兩條軸線的交會：部落與博物館的合作」『重現泰雅』pp. 7-12, 台東：国立台湾史前

文化博物館。

- 廬梅芬  
2007 『台湾当代原住民族芸術発展』台北：芸術家出版社。
- 松村瞭  
1927 「台湾恒春墾丁庄貝塚」『人類学雑誌』42(9): 372-373。
- 松澤員子  
1991 「日本領台以前の台湾における漢人と原住民族の交易についての一考察」竹村卓二編『漢族と隣接諸族—民族のアイデンティティの諸動態』（国立民族学博物館研究報告別冊 14）pp. 269-297, 大阪：国立民族学博物館。
- 1998 「序文」小林保祥著・松澤員子編『パイワン伝説集』pp. ix-xv, 台北：南天書局。
- 三尾裕子  
2005 「前言—小川・浅井資料とAA研」三尾裕子・豊島正之編『小川尚義・浅井恵倫 台湾資料研究』pp. 5-10, 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 宮本馨太郎  
1937 「台湾遠征の両氏帰る」『アチックマンズリー』No. 23。
- 宮本延人・瀬川孝吉・馬淵東一  
1987 『台湾の民族と文化』東京：東京六興出版。
- 宮岡真央子  
2001 「台湾原住民ツォウの旧〈獵場〉における土地権」『日本台湾学会報』3: 121-130。
- 2009a 「博物館資料のもつ現代的意味」野林厚志主編『百年來の凝視』pp. 72-85, 台北：順益台湾原住民博物館。
- 2009b 「皮製帽子」野林厚志主編『百年來の凝視』p. 134, 台北：順益台湾原住民博物館。
- 野林厚志  
1997 「鳥居龍蔵の乾板写真術」『精神のエクスペディション 学問の過去・現在・未来第二部』pp. 90-96, 東京：東京大学出版会。
- 2004 「鳥居龍蔵の台湾・西南中国調査」『史窓』34: 51-62, 徳島：徳島地方史研究会。
- 2008 「学術資料の展示がもつ意義と課題：民博企画展『台湾資料展』を通して」『博物館と大学—知の装置の連携と協働 2008年シンポジウム報告書』pp. 80-85, 大阪：国立民族学博物館。
- 2009a 「展示会趣旨」野林厚志主編『百年來の凝視』pp. 18-23, 台北：順益台湾原住民博物館。
- 2009b 「衣服裝飾用具」野林厚志主編『百年來の凝視』p. 137, 台北：順益台湾原住民博物館。
- 野林厚志・宮岡真央子  
2009 「台湾の先住民とは誰か—原住民族の分類史と〈伝統領域〉概念からみる台湾の先住性」窪田幸子・野林厚志編『「先住民」とはだれか』pp. 293-317, 京都：世界思想社。
- 小川徹  
1937 「A・M ニュース縮刷版」『アチックマンズリー』No. 28。
- O'Hanlon, Michael and Robert L. Welsch (eds.)  
2000 *Hunting the Gatherers: Ethnographic Collectors, Agents and Agency in Melanesia, 1870S-1930s*, Oxford: Berghahn Books.
- 瀬川孝吉  
1983 「私の台湾土俗品」渋谷区立松濤美術館編『台湾高砂族の服飾—瀬川コレクション』pp. 5-6, 東京：渋谷区立松濤美術館。
- 清水純  
2005 「平埔—漢化の進んだ平地の人びと」末成道男・曾士才編『講座世界の先住民族—ファースト・ピープルの現在 01 東アジア』pp. 106-123, 東京：明石書店。
- 下村作次郎  
2002 「台湾原住民文学とはなにか」『台湾原住民文学選1 名前を返せ』pp. 304-321, 東京：草風館。
- 宋文薫  
1998 「移川子之蔵興土俗人種学教室（代序）」『人類学玻璃版影像選輯』pp. viii-x, 台北：国立台湾大学出版中心。

野林 文化資源としての博物館資料

角南聡一郎

2009 「頸飾」野林厚志主編『百年來の凝視』p. 140, 台北：順益台湾原住民博物館。

鈴木秀夫編

1935 『台湾蕃界展望』台北：理蕃之友發行所。

蛸島直

2005 「プヌマ——文化とアイデンティティの動態」末成道男・曾士才編『講座世界の先住民族——ファースト・ピープルの現在 01 東アジア』pp. 139-152, 東京：明石書店。

鳥居龍藏

1976 「人類学研究・台湾の原住民（一）序論」『鳥居龍藏全集第五卷』pp. 1-74, 東京：朝日新聞社（初出は1910年）。

吳佰祿

2009 『采田福地』台北：國立台灣博物館。

山形真理子

2006 「ベトナムの甕棺葬——その起源に関する考察」『早稲田大学大学院文学研究科紀要第4分冊』52: 97-115, 東京：早稲田大学。

山路勝彦

1998 「蜂蟻の認同，祖先からの出奔——漢族でもなく，シラヤ族でもなく（1）」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究』3: 15-53, 東京：風響社。

2003 「女神たちの飛翔，歴史への癡痕——漢族でもなく，シラヤ族でもなく（3）」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究』7: 96-120, 東京：風響社。

2009 「蛇行する〈原住民工芸〉——台湾タイヤル族の織布文化，脱植民地化とモダニティ」『国立民族学博物館研究報告』34(1): 41-85。

山本芳美

2002 「台湾原住民のイレズミに関する研究」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究概覧』pp. 314-318, 東京：風響社。

2009 「刺青工具」野林厚志主編『百年來の凝視』p. 142, 台北：順益台湾原住民博物館。

楊南郡

2005 『幻の人類学者森丑之助——台湾原住民の研究に捧げた生涯』笠原正治・宮岡真央子・宮崎聖子編訳，東京：風響社。

尤瑪達陸

2008 「重回泰雅「圓滿」的生命循環」『重現泰雅』pp. 25-40, 台東：国立台湾史前文化博物館。

湯淺浩史

2000 『瀬川孝吉台湾先住民写真誌——ツォウ篇』台北：南天書局有限公司。

張譽騰（主筆）

1999 『築夢成真——林清富的文化夢』台北：順益台湾原住民博物館。

## 資料

展示会の概要

順益台湾原住民博物館十五周年館慶特別展示

日本国立民族学博物館珍藏台湾原住民文物展示

「百年來の凝視」

開催期間：2009年6月9日～同年10月11日

開催場所：台湾台北市順益台湾原住民博物館特別展示場

主催：順益台湾原住民博物館

共催：国立民族学博物館

協力：中華航空，泰安産物保險公司，園山大飯店，鉄道文化研究聯誼會

後援：行政院原住民族委員會，行政院文化建設委員會，外交部，台北市原住民事務委員會

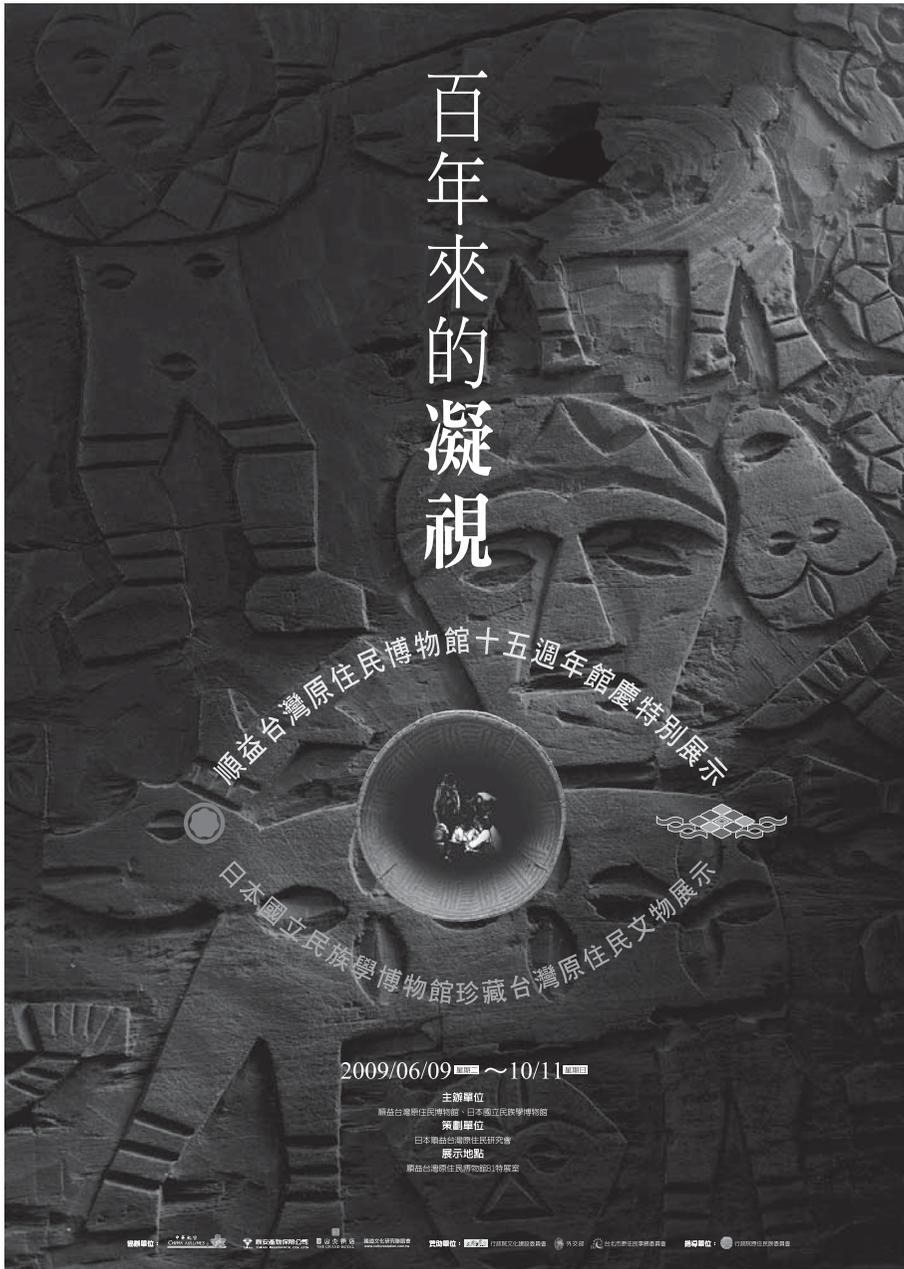


写真1 順益特別展のポスター。中央部の籠は出展した重文指定のサイシヤットの資料。籠を通して鳥居龍蔵がアミの調査を行っている風景が見えるような構図がとられている。



写真2 順益特別展の展示場内,「平埔族の文化」のコーナー。